



QoS の設定

- [QoS の前提条件, 2 ページ](#)
- [QoS コンポーネント, 2 ページ](#)
- [QoS の用語, 3 ページ](#)
- [QoS の概要, 3 ページ](#)
- [QoS の実装, 5 ページ](#)
- [QoS 有線モデル, 10 ページ](#)
- [分類, 11 ページ](#)
- [ポリシング, 15 ページ](#)
- [マーキング, 16 ページ](#)
- [トラフィックの調整, 18 ページ](#)
- [キューイングおよびスケジューリング, 22 ページ](#)
- [信頼動作, 27 ページ](#)
- [標準 QoS のデフォルト設定, 29 ページ](#)
- [有線ターゲットの QoS に関する制約事項, 31 ページ](#)
- [QoS の設定方法, 34 ページ](#)
- [QoS の特性と機能の設定, 57 ページ](#)
- [キューとシェーピングの設定, 64 ページ](#)
- [QoS のモニタリング, 72 ページ](#)
- [QoS の設定例, 75 ページ](#)
- [次の作業, 85 ページ](#)
- [QoS に関する追加情報, 85 ページ](#)
- [QoS の機能履歴と情報, 86 ページ](#)

QoS の前提条件

標準 QoS を設定する前に、次の事項を十分に理解しておく必要があります。

- 標準 QoS の概念。
- 従来の Cisco IOS QoS。
- モジュラ QoS CLI (MQC)
- QoS 実装について。
- 使用するアプリケーションのタイプおよびネットワークのトラフィック パターン
- トラフィックの特性およびネットワークのニーズ。たとえば、ネットワークのトラフィックがバーストであるかどうか。音声およびビデオストリーム用の帯域幅確保の必要性
- ネットワークの帯域幅要件および速度
- ネットワーク上の輻輳発生箇所

QoS コンポーネント

Quality of Service (QoS) は、次の主要コンポーネントで構成されています。

- 分類：分類は、アクセスコントロールリスト (ACL)、DiffServ コードポイント (DSCP)、サービス クラス (CoS)、およびその他の要因に基づいて、トラフィックの 1 つのタイプを区別するプロセスです。
- マーキングと変換：マーキングは、特定の情報をネットワークのダウンストリームデバイスに伝送するか、デバイス内の 1 つのインターフェイスから別のインターフェイスに情報を伝送するためにトラフィック上で使用されます。トラフィックをマークすると、そのトラフィックの QoS 動作が適用されます。これは、**set** コマンドを直接使用するか、テーブルマップ経由で入力値を受け取って出力の値に直接変換することで実行します。
- シェーピングとポリシング：シェーピングはダウンストリームデバイスで輻輳が発生しないようにトラフィック レートを調整しながら、トラフィックの最大レートを強制するプロセスのことです。最も一般的な形式のシェーピングは、物理または論理インターフェイスから送信されるトラフィックを制限するために使用されます。ポリシングは、トラフィッククラスに最大レートを強制するために使用されます。レートを超過した場合は、イベント発生直後に特定のアクションが実行されます。
- キューイング：キューイングは、トラフィックの輻輳を防止するために使用されます。トラフィックは、帯域割り当てに基づいて処理およびスケジューリングするために、特定のキューに送信されます。次に、トラフィックはポートを介してスケジュールまたは送信されます。
- 帯域幅：帯域幅の割り当てにより、QoS ポリシーが適用されるトラフィックで使用可能な容量が決まります。

- 信頼：信頼により、トラフィックがデバイスを通過できるようになります。明示的なポリシー設定がない場合、エンドポイントから、またはエンドポイントへの DiffServ コードポイント（DSCP）値、プレシデンス値、または CoS 値は保持されます。

QoS の用語

この QoS コンフィギュレーションガイドでは、次の用語が同じ意味で使用されます。

- アップストリーム（デバイスに対する方向）は、入力と同じ意味です。
- ダウンストリーム（デバイスに対する方向）は、出力と同じ意味です。

QoS の概要

QoS の概要

Quality of Service (QoS) を設定することで、他のトラフィックタイプの代わりに特定のトラフィックタイプを優先的に処理できます。QoS を設定しなかった場合、デバイスはパケットの内容やサイズに関係なく、各パケットにベストエフォート型のサービスを提供します。デバイスは、信頼性、遅延限界、またはスループットが保証されていないパケットを送信します。

次に、QoS が提供する具体的な機能を示します。

- 低遅延
- 帯域幅保証
- バッファリング能力とドロップ分野
- トラフィック ポリシング
- フレームまたはパケット ヘッダーの属性変更のイネーブル化
- 関連サービス

モジュラ QoS コマンドライン インターフェイス

デバイスでは、QoS 機能はモジュラ QoS コマンドライン インターフェイス (MQC) を使用してイネーブルにできます。MQC はコマンドライン インターフェイス (CLI) 構造を採用しています。これを使用すると、トラフィック ポリシーを作成し、作成したポリシーをインターフェイスにアタッチできます。1つのトラフィック ポリシーには、1つのトラフィック クラスと1つ以上の QoS 機能が含まれます。トラフィック クラスがトラフィックを分類するために使用されるのに対して、トラフィック ポリシーの QoS 機能は分類されたトラフィックの処理方法を決定します。MQC の主な目的の1つは、プラットフォームに依存しないインターフェイスを提供することにより、シスコプラットフォーム全体の QoS を設定することです。

有線アクセスでサポートされる QoS 機能

次の表に、有線アクセスでサポートされる QoS 機能について説明します。

表 1: 有線アクセスでサポートされる QoS 機能

機能	説明
サポートされるターゲット	<ul style="list-style-type: none"> • ギガビット イーサネット • 10 ギガビット イーサネット • 40 ギガビット イーサネット • VLAN
設定手順	service-policy コマンドを使用してインストールされる QoS ポリシー。
ポート レベルでサポートされるキューの数	ポートでは最大 8 つのキューがサポートされます。 有線ターゲットでは Approximate Fair Dropping or Discard (AFD) はサポートされません。
サポートされる分類メカニズム	<ul style="list-style-type: none"> • DSCP • IP precedence • CoS • QoS-group • 次を含む ACL のメンバーシップ： <ul style="list-style-type: none"> ◦ IPv4 ACL ◦ IPv6 ACL ◦ MAC ACL

階層型 QoS

デバイスは階層型 QoS (HQoS) をサポートします。HQoS を使用すると、次の作業を実行できます。

- 階層型分類：トラフィック分類は、他のクラスに基づいています。
- 階層型ポリシング：階層型ポリシーの複数のレベルでポリシングを設定するプロセス。

- 階層型シェーピング：シェーピングは、階層の複数のレベルで設定できます。



(注) 階層型シェーピングは、ポートシェーパードのみサポートされます。ポートシェーパードでは、親に対してクラスデフォルトの設定だけが可能で、クラスデフォルトのアクションはシェーピングだけです。

QoS の実装

ネットワークは通常、ベストエフォート型の配信方式で動作します。したがって、すべてのトラフィックに等しいプライオリティが与えられ、正しいタイミングで配信される可能性も同じです。輻輳が発生すると、すべてのトラフィックが等しくドロップされます。

QoS 機能を設定すると、特定のネットワークトラフィックを選択し、相対的な重要性に応じてそのトラフィックに優先度を指定し、輻輳管理および輻輳回避技術を使用して、優先処理を実行できます。ネットワークに QoS を実装すると、ネットワークパフォーマンスがさらに予測しやすくなり、帯域幅をより効率的に利用できるようになります。

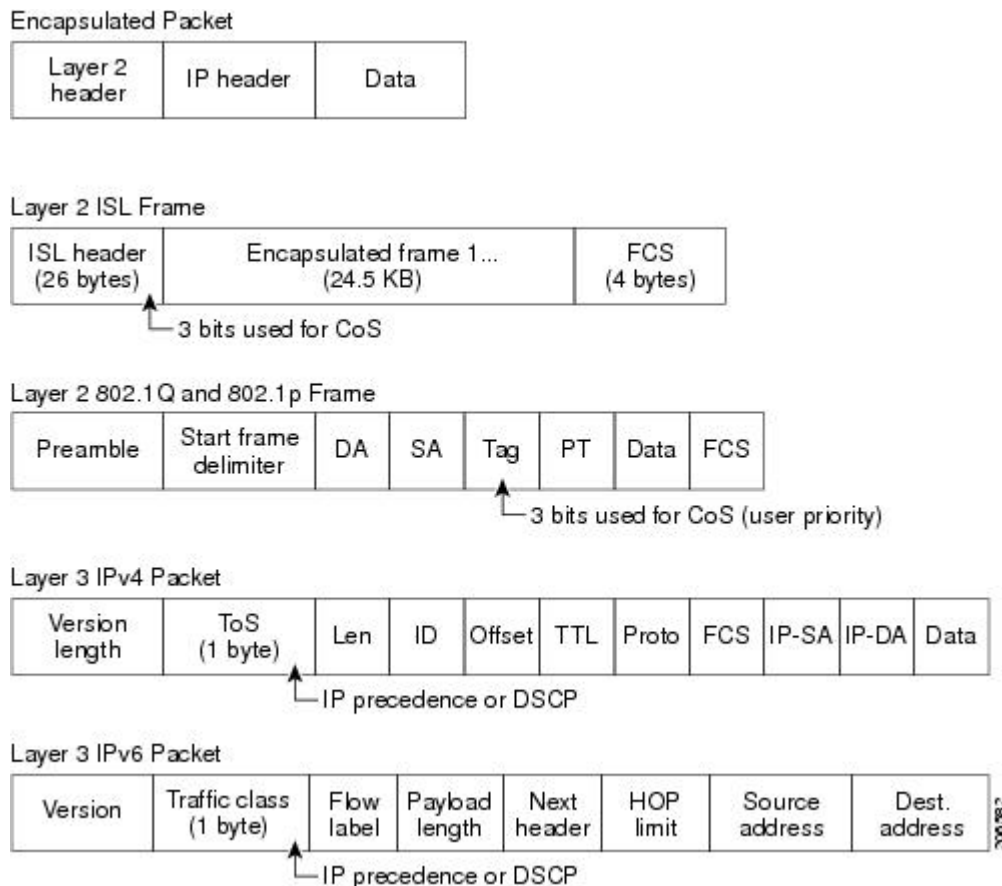
QoS は、インターネット技術特別調査委員会 (IETF) の規格である **Differentiated Services**

(Diff-Serv) アーキテクチャに基づいて実装されます。このアーキテクチャでは、ネットワークに入るときに各パケットを分類することが規定されています。

この分類は IP パケットヘッダーに格納され、推奨されない IP タイプオブサービス (ToS) フィールドの 6 ビットを使用して、分類 (クラス) 情報として伝達されます。分類情報をレイヤ 2 フレームでも伝達できます。

次の図にレイヤ2 フレームまたはレイヤ3 パケットの特殊ビットを示します。

図 1: フレームおよびパケットにおける QoS 分類レイヤ



レイヤ2 フレームのプライオリティビット

レイヤ2の ISL (スイッチ間リンク) フレームヘッダーには、下位3ビットで IEEE 802.1p サービスクラス (CoS) 値を伝達する1バイトのユーザフィールドがあります。レイヤ2 ISL トランクとして設定されたポートでは、すべてのトラフィックが ISL フレームに収められます。

レイヤ2 802.1Q フレームヘッダーには、2バイトのタグ制御情報フィールドがあり、上位3ビット (ユーザプライオリティビット) で CoS 値が伝達されます。レイヤ2 802.1Q トランクとして設定されたポートでは、ネイティブ Virtual LAN (VLAN) のトラフィックを除くすべてのトラフィックが 802.1Q フレームに収められます。

他のフレームタイプでレイヤ2 CoS 値を伝達することはできません。

レイヤ2 CoS 値の範囲は、0 (ロープライオリティ) ~ 7 (ハイプライオリティ) です。

レイヤ3パケットのプライオリティビット

レイヤ3 IP パケットは、IP precedence 値または Diffserv コードポイント (DSCP) 値のいずれかを伝送できます。DSCP 値は IP precedence 値と下位互換性があるので、QoS ではどちらの値も使用できます。

IP precedence 値の範囲は 0 ~ 7 です。DSCP 値の範囲は 0 ~ 63 です。

分類を使用したエンドツーエンドの QoS ソリューション

インターネットにアクセスするすべてのスイッチおよびルータはクラス情報に基づいて、同じクラス情報が与えられているパケットは同じ扱いで転送を処理し、異なるクラス情報のパケットはそれぞれ異なる扱いをします。パケットのクラス情報は、設定されているポリシー、パケットの詳細な検証、またはその両方に基づいて、エンドホストが割り当てられるか、または伝送中にスイッチまたはルータで割り当てることができます。パケットの詳細な検証は、コアスイッチおよびルータの負荷が重くならないように、ネットワークのエッジ付近で行います。

パス上のスイッチおよびルータは、クラス情報を使用して、個々のトラフィッククラスに割り当てられるリソースの量を制限できます。Diff-Serv アーキテクチャでトラフィックを処理するときの、各デバイスの動作をホップ単位動作といいます。パス上のすべてのデバイスに一貫性のあるホップ単位動作をさせることによって、エンドツーエンドの QoS ソリューションを構築できます。

ネットワーク上で QoS を実装する作業は、インターネットワーキングデバイスが提供する QoS 機能、ネットワークのトラフィックタイプおよびパターン、さらには着信および発信トラフィックに求める制御のきめ細かさによって、簡単にも複雑にもなります。

パケット分類

パケット分類は、特定の基準に基づいて定義したポリシーの複数のクラスの1つに属するものとしてパケットを識別するプロセスです。モジュラ QoS CLI (MQC) は、ポリシークラスベースの言語です。ポリシークラスの言語は、次の定義に使用されています。

- 1つまたは複数の一致基準があるクラスマップテンプレート
- 1つまたは複数のクラスがポリシーマップに関連付けられているポリシーマップテンプレート

ポリシーマップテンプレートは、デバイスの1つまたは複数のインターフェイスに関連付けられます。

パケット分類は、ポリシーマップで定義されたクラスの1つに属するものとしてパケットを識別するプロセスです。分類プロセスは、処理されるパケットがクラス内の特定のフィルタに一致した場合に終了します。これは、最初の一致による終了と呼ばれます。つまり、ポリシーマップ内のクラスの順序に関係なく、パケットがポリシー内の複数のクラスに一致する場合、最初のクラスの一致後に分類プロセスが終了します。

パケットがポリシーのクラスと一致しない場合は、ポリシーのデフォルト クラスに分類されます。すべてのポリシーマップには、システム定義のクラスのデフォルトクラスがあり、どのユーザ定義クラスにも一致しないパケットに一致します。

パケット分類は次のタイプに分類できます。

- パケットと合わせて伝搬される情報に基づく分類
- デバイス固有の情報に基づく分類
- 階層型分類

パケットと合わせて伝搬される情報に基づく分類

パケットの一部としてエンドツーエンドまたはホップ間で伝搬される情報に基づく分類には、一般的に次のものがあります。

- レイヤ 3 または レイヤ 4 ヘッダーに基づく分類
- レイヤ 2 情報に基づく分類

レイヤ 3 または レイヤ 4 ヘッダーに基づく分類

これは最も一般的な導入シナリオです。レイヤ 3 および レイヤ 4 ヘッダーの多くのフィールドは、パケット分類に使用できます。

最もきめ細かいレベルでは、この分類方法はフロー全体を照合するために使用できます。この導入タイプで、アクセス コントロール リスト (ACL) を使用できます。ACL は、フローのさまざまなサブセット (送信元 IP アドレスのみ、宛先 IP アドレスのみ、または両方の組み合わせなど) に基づく照合に使用することもできます。

分類は、IP ヘッダーの **precedence** 値または **DSCP** 値に基づいて実行することもできます。IP **precedence** フィールドは、特定の packets を処理する必要がある相対プライオリティを示すために使用されます。これは、IP ヘッダー内のタイプ オブ サービス (ToS) バイトの 3 ビットで構成されます。

次の表に、さまざまな IP **precedence** ビット値と名前を示します。

表 2: IP **precedence** 値と名前

IP precedence 値	IP precedence ビット	IP precedence の名前
[0]	000	ルーチン
1	001	[プライオリティ (Priority)]
2	010	緊急
3	011	フラッシュ

IP precedence 値	IP precedence ビット	IP precedence の名前
4	100	フラッシュ オーバーライド
5	101	クリティカル (Critical)
[6]	110	インターネットワーク制御
7	111	ネットワーク制御



(注) ネットワークのルーティング制御トラフィックすべては、IP precedence 値 6 をデフォルトで使用します。また、IP precedence 値 7 は、ネットワーク制御トラフィック用に予約されています。したがって、IP precedence 値 6 および 7 はユーザトラフィック用に推奨されません。

DSCP フィールドは、IP ヘッダーの 6 ビットで構成され、インターネット技術特別調査委員会 (IETF) の DiffServ ワーキング グループにより標準化されています。DSCP ビットが含まれた元の ToS バイトは、DSCP バイトの名前を変更しました。DSCP フィールドは、IP precedence と同様に IP ヘッダーの一部です。DSCP フィールドは、IP precedence フィールドのスーパーセットです。したがって、DSCP フィールドは、IP precedence に関連して説明した内容と同様の方法で使用され、設定されます。



(注) DSCP フィールド定義は IP precedence 値と下位互換性があります。
レイヤ 2 ヘッダー内の一部のフィールドは、ポリシーを使用して設定することもできます。

レイヤ 2 ヘッダーに基づく分類

レイヤ 2 ヘッダー情報に基づく分類は、さまざまな方法で実行できます。最も一般的な方法は次のとおりです。

- MAC アドレスベースの分類 (アクセス グループの場合のみ) : 分類は送信元 MAC アドレス (入力方向のポリシー用) および宛先 MAC アドレス (出力方向のポリシー用) に基づいています。
- サービス クラス : 分類は、IEEE 802.1p 標準に基づくレイヤ 2 ヘッダーの 3 ビットに基づいて行われます。これは通常、IP ヘッダーの ToS バイトにマッピングします。
- VLAN ID : 分類は、パケットの VLAN ID に基づいて行われます。



(注) レイヤ2ヘッダー内のこれらフィールドの一部は、ポリシーを使用して設定することもできません。

デバイス固有の情報に基づく分類

デバイスは分類がパケットヘッダーまたはペイロードの情報に基づいていない場合に使用できる分類メカニズムを提供します。

複数の入力インターフェイスから出力インターフェイスの特定のクラスに送信されるトラフィックを集約する必要が生じる場合があります。たとえば、複数のカスタマーエッジルータが、異なるインターフェイスの同じアクセス デバイスに接続される可能性があります。サービス プロバイダーは、特定のレートでコアに送信されるすべての集約音声トラフィックをポリシングする場合があります。ただし、異なるカスタマーからの音声トラフィックには、異なる ToS 設定がなされている可能性があります。QoS グループベースの分類は、次のシナリオで役立つ機能です。

入力インターフェイスで設定されたポリシーは、QoS グループを特定の値に設定します。この値は出力インターフェイスでイネーブルになっているポリシーのパケットの分類に使用できます。

QoS グループは、デバイス内部のパケットデータ構造内のフィールドです。QoS グループは、デバイスの内部ラベルであり、パケットヘッダーの一部ではないことに注意してください。

階層型分類

デバイスでは、他のクラスに基づく分類を実行できます。通常このアクションは、1つのクラスマップに複数クラスの分類メカニズム（フィルタ）を組み合わせた場合に必要になります。

QoS 有線モデル

QoS を実装するには、デバイスで次のタスクを実行する必要があります。

- トラフィック分類：パケットまたはフローを相互に区別します。
- トラフィック マーキングおよびポリシング：パケットが デバイスを移動するときに、特定の QoS を示すラベルを割り当て、パケットが設定されたリソース使用率制限に準拠するようにします。
- キューイングおよびスケジューリング：リソース競合があるすべての状況で、異なる処理を行います。
- シェーピング：デバイスから送信されるトラフィックが、特定のトラフィック プロファイルに適合するようにします。

入力ポートのアクティビティ

次のアクティビティはデバイスの入力ポートで発生します。

- **分類**：パケットと QoS ラベルを関連付けて、パケットごとに異なるパスを分類します。たとえば、デバイスは、ある種類のトラフィックを別の種類のトラフィックと区別するためにパケット内の CoS または DSCP を QoS ラベルにマッピングします。生成された QoS ラベルは、このパケットでこれ以降に実行されるすべての QoS アクションを識別します。
- **ポリシング**：ポリシングでは、着信トラフィックのレートを設定済みポリサーと比較して、パケットが適合か不適合かを判別します。ポリサーは、トラフィックフローで消費される帯域幅を制限します。その判別結果がマーカーに渡されます。
- **マーキング**：マーキングでは、パケットが不適合の場合の対処法に関して、ポリサーおよび設定情報を検討し、パケットの扱い（パケットを変更しないで通過させるか、パケットの QoS ラベルをマークダウンするか、またはパケットをドロップするか）を決定します。

出力ポートのアクティビティ

次のアクティビティはデバイスの出力ポートで発生します。

- **ポリシング**：ポリシングでは、着信トラフィックのレートを設定済みポリサーと比較して、パケットが適合か不適合かを判別します。ポリサーは、トラフィックフローで消費される帯域幅を制限します。その判別結果がマーカーに渡されます。
- **マーキング**：マーキングでは、パケットが不適合の場合の対処法に関して、ポリサーおよび設定情報を検討し、パケットの扱い（パケットを変更しないで通過させるか、パケットの QoS ラベルをマークダウンするか、またはパケットをドロップするか）を決定します。
- **キューイング**：キューイングでは、使用する出力キューを選択する前に、QoS パケットラベルと対応する DSCP 値または CoS 値を評価します。複数の入力ポートが 1 つの出力ポートに同時にデータを送信すると輻輳が発生することがあるため、重み付けテールドロップ (WTD) によってトラフィッククラスを区別し、QoS ラベルに基づいてパケットに別々のしきい値を適用します。しきい値を超過している場合、パケットはドロップされます。

分類

分類とは、パケットのフィールドを検証して、トラフィックの種類を区別するプロセスです。QoS がデバイス上でイネーブルになっている場合にのみ、分類はイネーブルです。デフォルトにより、QoS はデバイスでイネーブルになっています。

分類時に、デバイスは検索処理を実行し、パケットに QoS ラベルを割り当てます。QoS ラベルは、パケットに対して実行するすべての QoS アクション、およびパケットの送信元キューを識別します。

アクセスコントロールリスト

IP 標準 ACL、IP 拡張 ACL、またはレイヤ 2 MAC ACL を使用すると、同じ特性を備えたパケットグループ（クラス）を定義できます。また IPv6 ACL に基づいて IP トラフィックを分類することもできます。

QoS のコンテキストでは、アクセスコントロールエントリ（ACE）の許可および拒否アクションの意味が、セキュリティ ACL の場合とは異なります。

- 許可アクションとの一致が検出されると（最初の一致の原則）、指定の QoS 関連アクションが実行されます。
- 拒否アクションと一致した場合は、処理中の ACL がスキップされ、次の ACL が処理されます。



（注） 拒否アクションは、Cisco IOS XE リリース 3.7.4E 以降のリリースでサポートされています。

- 許可アクションとの一致が検出されないまま、すべての ACE の検証が終了した場合、そのパケットでは QoS 処理は実行されず、デバイスがベストエフォート型サービスを実行します。
- ポートに複数の ACL が設定されている場合に、許可アクションを含む最初の ACL とパケットの一致が見つかったら、それ以降の検索処理は中止され、QoS 処理が開始されます。



（注） アクセスリストを作成するときは、アクセスリストの末尾に暗黙の拒否ステートメントがデフォルトで存在し、それ以前のステートメントで一致が見つからなかったすべてのパケットに適用されることに注意してください。

ACL でトラフィック クラスを定義した後で、そのトラフィック クラスにポリシーを結合できます。ポリシーにはそれぞれにアクションを指定した複数のクラスを含めることができます。ポリシーには、特定の集約としてクラスを分類する（DSCP を割り当てるなど）コマンドまたはクラスのレート制限を実施するコマンドを含めることができます。このポリシーを特定のポートに結合すると、そのポートでポリシーが有効になります。

IP ACL を実装して IP トラフィックを分類する場合は、**access-list** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。レイヤ 2 MAC ACL を実装して非 IP トラフィックを分類する場合は、**mac access-list extended** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

クラス マップ

クラスマップは、特定のトラフィックフロー（またはクラス）に名前を付けて、他のすべてのトラフィックと区別するためのメカニズムです。クラスマップでは、さらに細かく分類するため

に、特定のトラフィックフローと照合する条件を定義します。この条件には、ACLで定義されたアクセスグループとの照合や、DSCP 値または IP precedence 値あるいは CoS 値の特定のリストとの照合を含めることができます。複数のトラフィックタイプを分類する場合は、別のクラスマップを作成し、異なる名前を使用できます。パケットをクラスマップ条件と照合した後で、ポリシーマップを使用してさらに分類します。

クラスマップを作成するには、**class-map** グローバル コンフィギュレーション コマンドまたは **class** ポリシーマップ コンフィギュレーション コマンドを使用します。複数のポリシー間でマップを共有する場合には、**class-map** コマンドを使用する必要があります。**class-map** コマンドを入力すると、デバイスはクラスマップ コンフィギュレーション モードを開始します。このモードで、**match** クラスマップ コンフィギュレーション コマンドを使用して、トラフィックの一致条件を定義します。

classclass-default ポリシーマップ コンフィギュレーション コマンドを使用して、デフォルト クラスを作成できます。デフォルト クラスはシステム定義であり、設定することはできません。分類されていないトラフィック（トラフィック クラスで指定された一致基準を満たさないトラフィック）は、デフォルト トラフィックとして処理されます。

ポリシー マップ

ポリシーマップでは、作用対象のトラフィック クラスを指定します。アクションには次が含まれます。

- トラフィック クラスに特定の DSCP 値または IP precedence 値を設定する
- トラフィック クラスに CoS 値を設定する
- QoS グループを設定する
- トラフィックがアウト オブ プロファイルになった場合の、トラフィックの帯域幅制限やアクションを指定する

ポリシーマップを効率的に機能させるには、ポートにポリシーマップを結合する必要があります。

ポリシーマップを作成して名前を付けるには、**policy-map** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。このコマンドを入力すると、デバイスはポリシーマップ コンフィギュレーション モードを開始します。このモードでは、**class**、または **set** ポリシーマップ コンフィギュレーション コマンドおよびポリシーマップ クラス コンフィギュレーション コマンドを使用して、特定のトラフィック クラスに対して実行するアクションを指定します。

ポリシーマップは、ポリシーマップ クラス コンフィギュレーション コマンド **police** と **bandwidth** を使用して設定することもできます。これらのコマンドは、ポリサー、トラフィックの帯域幅制限、および制限を超過した場合のアクションを定義します。さらに、ポリシーマップは **priority** ポリシーマップ クラス コンフィギュレーション コマンドを使用してより詳細に設定し、クラスまたは **queue-buffers** および **queue-limit** キューイング マップ クラス コンフィギュレーション コマンドの優先順位をスケジュールすることができます。

ポリシーマップを有効化するには、**service-policy** インターフェイス コンフィギュレーション コマンドを使用してポートに接続します。



(注) ポリシー マップに **priority** と **set** を両方設定することはできません。これらのコマンド両方をポリシー マップに設定すると、ポリシー マップをインターフェイスに適用した際に、エラーメッセージが表示されます。次に、この制限の例を示します。

```
Switch# configure terminal
Switch(config)# class-map cmap
Switch(config-cmap)# exit
Switch(config)# class-map classmap1
Switch(config-cmap)# exit
Switch(config)# policy-map pmap
Switch(config-pmap)# class cmap
Switch(config-pmap-c)# priority
Switch(config-pmap-c)# exit
Switch(config-pmap)# class classmap1
Switch(config-pmap-c)# set
Switch(config-pmap-c)# exit
Switch(config-pmap)# exit
Switch(config)# interface gigabitethernet 0/1/1
Switch(config-if)# service-policy output pmap

Non-queuing action only is unsupported in a queuing policy!!!
%QOS-6-POLICY_INST_FAILED:
Service policy installation failed
```

物理ポートのポリシー マップ

実行対象となるトラフィッククラスを指定する非階層型ポリシーマップを、物理ポート上に設定できます。アクションには、特定の DSCP あるいはトラフィッククラスでの IP プレシデンス値または QoS の値の設定、一致する各トラフィッククラス（ポリサー）に対するトラフィックの帯域幅限度の指定、トラフィックがアウトオブプロファイル（マーキング）の場合の処理などが含まれます。

ポリシー マップには、次の特性もあります。

- 1 つのポリシー マップに、それぞれ異なる一致条件とポリサーを指定した複数のクラスステートメントを指定できます。
- ポリシー マップには、事前に定義されたデフォルトのトラフィッククラスを含めることができます。デフォルトのトラフィッククラスはマップの末尾に明示的に配置されます。

classclass-default ポリシーマップ コンフィギュレーション コマンドを使用してデフォルトのトラフィッククラスを設定すると、未分類トラフィック（トラフィッククラスで指定された一致基準に一致しないトラフィック）はデフォルトのトラフィッククラス (**class-default**) として処理されます。

- 1 つのポートから受信されたトラフィックタイプごとに、別々のポリシーマップクラスを設定できます。

VLAN のポリシー マップ

デバイスは、VLAN の QoS 機能をサポートします。これにより、ユーザは、着信フレームの VLAN 情報を使用して VLAN レベルで QoS 処理（分類と QoS アクション）を実行できます。VLAN ベー

スの QoS では、サービス ポリシーが SVI インターフェイスに適用されます。VLAN ポリシー マップに属するすべての物理インターフェイスは、ポートベースのポリシー マップの代わりに VLAN ベースのポリシー マップが表示されるようにプログラムする必要があります。

ポリシー マップは VLAN SVI に適用されますが、ポリシング（レート制限）アクションはポート単位でしか実行できません。複数の物理ポートからのトラフィックの合計が認識されるようにポリサーを設定できません。各ポートは、そのポートに着信するトラフィックを制御する別のポリサーを必要とします。

ポリシング

パケットが分類され、DSCP ベース、CoS ベース、または QoS グループのラベルが割り当てられると、ポリシングおよびマーキング プロセスを開始できます。

ポリシングには、トラフィックの帯域幅限度を指定するポリサーの作成が伴います。制限を超えるパケットは、「アウトオブプロファイル」または「不適合」になります。各ポリサーはパケットごとに、パケットが適合か不適合かを判別し、パケットに対するアクションを指定します。これらのアクションはマーカーによって実行されます。パケットを変更しないで通過させるアクション、パケットをドロップするアクション、またはパケットに割り当てられた DSCP または CoS 値を変更（マークダウン）してパケットの通過を許可するアクションなどがあります。

パケットの混乱を避けるため、通常、適合トラフィックも不適合トラフィックも同じキューを通過します。



(注)

すべてのトラフィックは、ブリッジングされるかルーティングされるかに関係なく、ポリサーの影響を受けます（ポリサーが設定されている場合）。その結果、ブリッジングされたパケットは、ポリシングまたはマーキングが行われたときにドロップされたり、DSCP または CoS フィールドが変更されたりすることがあります。

物理ポートでのみポリシングを設定できます。

ポリシー マップおよびポリシングアクションを設定したら、**service-policy** インターフェイス コンフィギュレーション コマンドを使用して、入力ポートまたは SVI にポリシーを付加します。

トークンバケット アルゴリズム

ポリシングはトークンバケット アルゴリズムを使用します。各フレームがデバイスに着信すると、バケットにトークンが追加されます。バケットにはホールがあり、平均トラフィック レートとして指定されたレート（ビット/秒）で送信されます。バケットにトークンが追加されるたびに、デバイスはバケット内に十分なスペースがあるかを確認します。十分なスペースがなければ、パケットは不適合とマーキングされ、指定されたポリサーアクション（ドロップまたはマークダウン）が実行されます。

バケットが満たされる速度は、バケット深度（burst-byte）、トークンが削除されるレート（rate-bps）、および平均レートを上回るバースト期間によって決まります。バケットのサイズに

よってバースト長に上限が設定され、バックツーバックで送信できるフレーム数が制限されます。バースト期間が短い場合、バケットはオーバーフローせず、トラフィックフローに何のアクションも実行されません。ただし、バースト期間が長く、レートが高い場合、バケットはオーバーフローし、そのバーストのフレームに対してポリシングアクションが実行されます。

バケットの深さ（バケットがオーバーフローするまでの許容最大バースト）を設定するには、**police** ポリシー マップ クラス コンフィギュレーション コマンドの **burst-byte** オプションを使用します。トークンがバケットから削除される速度（平均速度）を設定するには、**police** ポリシー マップ クラス コンフィギュレーション コマンドの **rate** オプションを使用します。

マーキング

マーキングは、特定の情報をネットワークのダウンストリーム デバイスに伝送するか、デバイス内の 1 つのインターフェイスから別のインターフェイスに情報を伝送するために使用します。

マーキングは、パケット ヘッダーの特定のフィールド/ビットを設定するか、デバイス内部のパケット構造内の特定のフィールドを設定するために使用できます。さらに、マーキング機能はフィールド間のマッピングの定義に使用できます。QoS では次のマーキング方法を使用できます。

- パケット ヘッダー
- デバイス固有の情報
- テーブル マップ

パケット ヘッダーのマーキング

パケット ヘッダー フィールドのマーキングは 2 種類の一般的なカテゴリに分類できます。

- IPv4/v6 ヘッダー ビット マーキング
- レイヤ 2 ヘッダー ビット マーキング

IP レベルのマーキング機能は、**precedence** を設定したり、IP ヘッダー内の **DSCP** を特定の値に設定したりして、ダウンストリーム デバイス（スイッチまたはルータ）で特定のホップごとの動作を実行するために使用されます。また、異なる入力インターフェイスからのトラフィックを、出力インターフェイス内の単一のクラスに集約するためにも使用できます。この機能は現在、IPv4 および IPv6 ヘッダーでサポートされています。

レイヤ 2 ヘッダーのマーキングは、通常、ダウンストリーム デバイス（スイッチまたはルータ）のドロップ動作に影響を与えるために使用されます。これは、レイヤ 2 ヘッダーの一致と並行して動作します。ポリシーマップを使用して設定されるレイヤ 2 ヘッダーのビットはサービスクラスです。

スイッチ固有の情報のマーキング

この形式のマーキングには、パケットヘッダーの一部ではないパケットデータ構造内のフィールドのマーキングが含まれます。これにより、後でデータパスでマーキングを使用できるようになります。これはスイッチ間で伝搬されません。QoS グループのマーキングはこのカテゴリに分類されます。この形式のマーキングは、入力インターフェイスで有効になっているポリシーだけでサポートされます。対応する照合機能と同じスイッチの出力インターフェイスでイネーブルにし、適切な QoS アクションを適用することができます。

テーブルマップのマーキング

テーブルマップマーキングは変換表を使用したフィールド間のマッピングおよび変換を可能にします。この変換表はテーブルマップと呼ばれます。

インターフェイスに接続されているテーブルマップに応じて、パケット内の CoS、DSCP、および書き換えられます。デバイスにより、入力のテーブルマップポリシーと出力のテーブルマップポリシーの両方を設定できます。



(注) デバイスのスタックは、合計 14 のテーブルマップをサポートします。各方向の有線ポート単位で 1 つのテーブルマップだけがサポートされます。

たとえば、テーブルマップは、レイヤ 2 CoS 設定をレイヤ 3 の **precedence** 値にマッピングするのに使用できます。この機能により、マッピングを実行する方法を示す 1 つのテーブルに複数の **set** コマンドを組み合わせて使用することができます。このテーブルは複数のポリシーで参照するか、または同じポリシー内で複数回参照することができます。

次の表に、現在サポートされているマッピング形式を示します。

表 3: **To-From** 関係を確立するために使用されるパケット マーキング タイプ

パケット マーキング タイプ 「To」	パケット マーキング タイプ 「From」
Precedence	CoS
Precedence	QoS グループ
DSCP	CoS
DSCP	QoS グループ
CoS	Precedence
CoS	DSCP
QoS グループ	Precedence

パケット マーキング タイプ 「To」	パケット マーキング タイプ 「From」
QoS グループ	DSCP
QoS グループ	EXP

テーブル マップ ベースのポリシーでは、次の機能がサポートされています。

- 変換：1つの DSCP 値セットから別の DSCP 値セットにマッピングするテーブル マップを利用できます。また、このテーブル マップは出力ポートに付加できます。
- 書き換え：入力パケットは設定されたテーブル マップに基づいて書き換えられます。
- マッピング：テーブル マップ ベースのポリシーは、set ポリシーの代わりに使用できます。

テーブル マップ マーキングには、次の手順が必要です。

- 1 テーブル マップの定義：**table-map** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用して値をマッピングします。テーブルが使用されるクラスまたはポリシーは認識されません。テーブル マップのデフォルトのコマンドは、「from」フィールドで一致がない場合に値が「to」フィールドにコピーされることを示すために使用されます。
- 2 ポリシー マップの定義：テーブル マップを使用するポリシー マップを定義します。
- 3 ポリシーをインターフェイスに関連付けます。



(注) 入力ポートのテーブル マップ ポリシーによって、そのポートの信頼設定が qos-marking の「from」タイプに変更されます。

トラフィックの調整

ネットワークで QoS をサポートするには、サービスプロバイダーネットワークに入るトラフィックをネットワーク境界ルータでポリシングし、トラフィック レートがサービス範囲内に収まるようにする必要があります。ネットワーク コアのプロビジョニングで処理できるように設定されているトラフィックよりも多くのトラフィックがネットワーク境界のいくつかのルータから送信開始されると、トラフィック負荷の増加によってネットワーク輻輳が発生します。ネットワークのパフォーマンスが低下すると、すべてのネットワークトラフィックで QoS を提供することが困難になります。

トラフィック ポリシング機能（ポリシング機能を使用）およびシェーピング機能（トラフィックシェーピング機能を使用）はトラフィック レートを管理しますが、トークンが不足した場合のトラフィックの処理方法が異なります。トークンの概念は、トークンバケット方式、トラフィック測定機能に基づいています。



(注) ネットワーク トラフィックで QoS テストを実行すると、シェーパーデータとポリシングデータで異なる結果が生じることがあります。シェーピングからのネットワーク トラフィックデータの方が、より正確な結果が得られます。

この表は、ポリシングとシェーピングの機能を比較します。

表 4: ポリシングとシェーピングの機能の比較

ポリシング機能	シェーピング機能
適合するトラフィックをライン レートで送信し、バーストを許可します。	トラフィックが固定レートでスムーズに送信されます。
トークンが不足すると、アクションがただちに実行されます。	トークンが不足すると、パケットをバッファし、後でトークンが使用可能になった時点で送信します。シェーピングを使用するクラスにはキューが関連付けられており、このキューを使用してパケットがバッファされます。
ポリシングは、ビット/秒、パケット/秒、およびセル/秒など複数の単位で設定できます。	シェーピングの設定単位はビット/秒だけです。
ポリシングには、イベントに複数の可能なアクションが関連付けられています。このようなアクションの例としては、イベント、マーキング、ドロッピングなどがあります。	シェーピングはプロファイルを満たさないパケットをマークできません。
入出力両方のトラフィックで機能します。	出力トラフィックに対してのみ実装されます。
ウィンドウサイズを小さくしたためにパケットドロップが発生すると、伝送制御プロトコル (TCP) は、回線速度でラインを検出しますが、設定されたレートに適合します。	TCP は低速回線があることを検出し、再送信タイマーを適切に調整できます。これにより、再送信の範囲が狭くなり、TCP に負担をかけません。

ポリシング

QoS ポリシング機能は、トラフィック クラスに最大レートを強制するために使用されます。QoS ポリシング機能は、プライオリティ機能と合わせて、プライオリティ トラフィックを制限するためにも使用できます。レートを超過した場合は、イベント発生直後に特定のアクションが実行されます。レート (認定情報レート [CIR] および最大情報レート [PIR]) とバーストパラメータ (適合バーストサイズ [B_c] および拡張バーストサイズ [B_e]) は、すべてバイト/秒で設定されます。

QoS では次のポリシング形式またはポリサーがサポートされます。

- シングルレート 2 カラー ポリシング
- デュアルレート 3 カラー ポリシング



(注) シングルレート 3 カラー ポリシングはサポートされません。

シングルレート 2 カラー ポリシング

シングルレート 2 カラー ポリサーは、CIR と B_c だけを設定するモードです。

B_c は任意のパラメータであり、これが指定されていない場合、デフォルトで計算されます。このモードでは、着信パケットに十分なトークンがある場合、パケットは適合すると見なされます。パケットの到着時に、十分なトークンが B_c の範囲内で使用できない場合、パケットは設定レートを超えたと見なされます。



(注) トークンバケット アルゴリズムの詳細については、[トークンバケット アルゴリズム](#)、(15 ページ) を参照してください。

デュアルレート 3 カラー ポリシング

デュアル レート ポリサーでのデバイスは、カラー ブラインド モードのみをサポートします。このモードでは、認定情報レート (CIR) および最大情報レート (PIR) を設定します。名前からわかるように、この場合、最大レート用に 1 つ、認定レート用に 1 つの、合わせて 2 つのトークンバケットがあります。



(注) トークンバケット アルゴリズムの詳細については、[トークンバケット アルゴリズム](#)、(15 ページ) を参照してください。

カラー ブラインド モードでは、最大レートのバケットの着信パケットが最初にチェックされます。十分な数のトークンがない場合、パケットはレートに違反していると思なされます。十分な数のトークンがある場合、次に適合レートのバケットのトークンをチェックして、十分な数のトークンがあるかどうかを判別します。最大レートのバケットにあるトークンは、パケットのサイズによって減少します。十分な数のトークンがない場合、パケットが設定されているレートを超過していると思なされます。十分な数のトークンがある場合、パケットは適合すると見なされ、両方のバケットのトークンは、パケットのサイズによって減少します。

トークン補充レートは着信パケットによって異なります。あるパケットが時間 T1 に着信し、次のパケットが時間 T2 に着信したとします。T1 と T2 間の時間間隔は、トークンバケットに追加される必要があるトークンの数を決定します。これは次のように計算されます。

パケットの時間間隔 (T2-T1) * CIR) / 8 バイト

シェーピング

シェーピングは、ダウンストリーム スイッチおよびルータで輻輳が発生しないようにトラフィック レートを調整しながら、トラフィックの最大レートを強制するプロセスのことです。最も一般的な形式のシェーピングは、物理または論理インターフェイスから送信されるトラフィックを制限するために使用されます。

シェーピングにはバッファが関連付けられており、十分なトークンがないパケットがすぐにドロップされずにバッファされます。シェーピングされるトラフィックのサブセットで使用可能なバッファ数は制限され、さまざまな要因に基づいて計算されます。使用可能なバッファの数は、特定の QoS コマンドを使用して調整できます。パケットはドロップされずに、バッファが使用可能になった時点でバッファされます。

クラスベース トラフィック シェーピング

デバイスではクラスベースのトラフィック シェーピングを使用します。このシェーピング機能は、インターフェイスに関連付けられたポリシーのクラスでイネーブルになります。シェーピングが設定されたクラスには、トークンがないパケットを保持する複数のバッファが割り当てられます。バッファされたパケットはFIFOを使用してクラスから送信されます。最も一般的な形式の使用では、クラスベースのシェーピングを使用して、全体として物理インターフェイスまたは論理インターフェイスの最大レートを強制します。クラスでは次のシェーピング形式がサポートされます。

- 平均レート シェーピング
- 階層型シェーピング

シェーピングは、トークン バケットを使用して実行されます。CIR、B_c、B_e の値は、パケットが送信されるレートと、トークンが補充されるレートを決定します。



(注) トークンバケットアルゴリズムの詳細については、[トークンバケットアルゴリズム](#)、(15 ページ) を参照してください。

平均レート シェーピング

平均レート シェーピングを設定するには、**shape average** ポリシーマップ クラス コマンドを使用します。

このコマンドは、特定のクラスの最大帯域幅を設定します。キューの帯域幅は、ポートでさらに使用できる帯域幅があってもこの値に制限されます。では、割合またはターゲットビットレート値でシェーピング平均を設定できます。

階層型シェーピング

シェーピングは、階層内の複数のレベルで設定することもできます。これは、シェーピングを設定した親ポリシーを作成して、追加のシェーピングを設定した子ポリシーを親ポリシーに付加することで実現できます。

次の2つの階層型シェーピングがサポートされています。

- ポート シェーパー
- ユーザ設定のシェーピング

ポートシェーパーでは、クラスデフォルトが使用され、親で実行できるアクションはシェーピングだけです。キューイングアクションはポートシェーパーがある子で実行されます。ユーザ設定のシェーピングを使用すると、子のキューイングアクションを設定することはできません。

キューイングおよびスケジューリング

は、トラフィックの輻輳を防止するためにキューイングおよびスケジューリングを使用します。は、次のキューイングおよびスケジューリング機能をサポートします。

- 帯域幅
- 重み付けテール ドロップ
- プライオリティ キュー
- キュー バッファ

ポートにキューイングポリシーを定義すると、制御パケットは、しきい値が最も高いベストプライオリティキューにマッピングされます。制御パケットのキューマッピングは、以下の状況では異なって機能します。

- Quality of Service (QoS) ポリシーなし : QoS ポリシーが設定されていない場合、DSCP 値が 16、24、48、および 56 の制御パケットは、最も高いしきい値 threshold2 を持つキュー 0 にマッピングされます。
- ユーザ定義のポリシーあり : 出力ポートに設定されているユーザ定義のキューイング ポリシーは、制御パケットのデフォルトのプライオリティキューの設定に影響する可能性があります。

制御トラフィックは、次のルールに基づいて最適なキューにリダイレクトされます。

- 1 ユーザ ポリシーで定義されている場合、最高レベルのプライオリティ キューがベストキューとして常に選択されます。
- 2 プライオリティキューがない場合、Cisco IOS ソフトウェアは、ベストキューとしてキュー 0 を選択します。ソフトウェアがベストキューとしてキュー 0 を選択した場合は、コントロールプレーントラフィックに最適な QoS 処理を提供するために、このキューに最大帯域幅を定義する必要があります。

- 3 しきい値がベスト キューで設定されていない場合、Cisco IOS ソフトウェアは、DiffServ コードポイント (DSCP) 値が 16、24、48、および 56 の制御パケットを `threshold2` にマッピングされるように割り当て、ベストキュー内の残りの制御トラフィックを `threshold1` に再割り当てします。

ポリシーが制御トラフィックに対して明示的に設定されていない場合、Cisco IOS ソフトウェアはすべての一致しない制御トラフィックを `threshold2` を持つベストキューにマッピングし、一致する制御トラフィックはポリシーで設定されたキューにマッピングされます。



(注) レイヤ 3 パケットに適切な QoS を提供するために、パケットが適切なキューに明示的に分類されていることを確認する必要があります。ソフトウェアはデフォルトキューで DSCP 値を検出すると、自動的にこのキューをベストキューとして再割り当てします。

帯域幅

は次の帯域幅設定をサポートしています。

- 帯域幅の割合
- 帯域幅余剰比率

帯域幅の割合

特定のクラスに最小帯域幅を割り当てるには、**bandwidth percent** ポリシーマップ クラス コマンドを使用します。合計が 100 % を超えることはできず、合計が 100 % 未満である場合は、残りの帯域幅がすべての帯域幅キューで均等に分割されます。



(注) キューは、他のキューが全体のポート帯域幅を使用しない場合は、帯域幅をオーバーサブスクライブすることができます。

ポリシーマップで帯域幅タイプを混在させることはできません。たとえば、1つのポリシーマップで帯域幅の割合と `kbps` の両方を使用して、帯域幅を設定することはできません。

帯域幅余剰比率

指定されたキューでの未使用帯域幅の共有率を作成するには、**bandwidth remaining ratio** ポリシーマップクラスコマンドを使用します。未使用帯域幅は、これら指定されたキューにより、設定で指定されている比率で使用されます。このコマンドは、**priority** コマンドがポリシー内の特定のキューでも使用される場合に使用します。

比率を割り当てる場合には、これらの比率に従って、キューに特定の重みが割り当てられます。

比率は 0～100 の範囲で指定できます。たとえば、1つのクラスの帯域幅余剰比率を 2 に設定し、別のクラスで帯域幅余剰比率 4 のキューを設定できます。帯域幅余剰比率 4 は、帯域幅余剰比率 2 の 2 倍の回数スケジュールされます。

ポリシーの全帯域幅の比率の割り当ては 100 を超えることができます。たとえば、1つのキューの帯域幅余剰比率を 50 に設定し、別のキューに帯域幅余剰比率 100 を設定できます。

重み付けテールドロップ

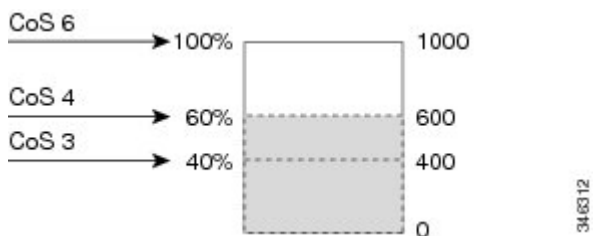
の出力キューは、重み付けテールドロップ (WTD) と呼ばれるテールドロップ輻輳回避メカニズムの拡張バージョンを使用します。WTD はキュー長を管理したり、トラフィック分類ごとにドロップ優先順位を設定したりするために実装されています。

フレームが特定のキューにキューイングされると、WTD はフレームに割り当てられた QoS ラベルを使用して、それぞれ異なるしきい値を適用します。この QoS ラベルのしきい値を超えると (宛先キューの空きスペースがフレームサイズより小さくなると)、がフレームをドロップします。

各キューには 3 種類の設定可能なしきい値があります。QoS ラベルは、3 つのしきい値のうちどれがフレームの影響を受けるかを決定します。

次の図は、サイズが 1000 フレームであるキューでの WTD の動作の例を示しています。ドロップ割合は次のように設定されています。40% (400 フレーム)、60% (600 フレーム)、および 100% (1000 フレーム) です。これらのパーセンテージは、40% しきい値の場合は最大 400 フレーム、60% しきい値の場合は最大 600 フレーム、100% しきい値の場合は最大 1000 フレームをキューイングできるという意味です。

図 2: WTD およびキューの動作



例では、CoS 値 6 は他の CoS 値よりも重要度が高く、100% のドロップしきい値 (キューフルステート) に割り当てられます。CoS 値 4 は 60% しきい値に、CoS 値 3 は 40% しきい値に割り当てられます。これらのしきい値の割り当てはすべて、`queue-limit cos` コマンドを使用します。

600 のフレームが格納されているキューに、新しいフレームが着信したとします。これは CoS 値 4 を使用し、60% のしきい値が適用されます。このフレームがキューに追加されると、しきい値を超過するため、がフレームをドロップします。

重み付けテール ドロップのデフォルト値

次に、重み付けテールドロップ (WTD) のデフォルト値と、WTD しきい値を設定するためのルールを示します。

- WTD に対して 2 つ以下のキュー制限割合を設定する場合、WTD のデフォルト値はこれらのしきい値に割り当てられます。

次に、WTD しきい値のデフォルト値を示します。

表 5: WTD しきい値のデフォルト値

しきい値 (Threshold)	デフォルト値の割合
[0]	80
1	90
2	400

- 異なる 3 つの WTD しきい値が設定されている場合、キューは設定どおりにプログラムされます。
- 2 つの WTD しきい値が設定されている場合、最大値の割合は 400 です。
- 1 つの WTD しきい値が x として設定されている場合、最大値の割合は 400 です。
 - x の値が 90 未満の場合、 $\text{threshold1} = 90$ および $\text{threshold0} = x$ です。
 - x の値が 90 の場合、 $\text{threshold1} = 90$ 、 $\text{threshold0} = 80$ です。
 - x の値が 90 より大きい場合、 $\text{threshold1} = x$ 、 $\text{threshold0} = 80$ です。

プライオリティ キュー

各ポートは 8 つの出力キューをサポートし、そのうち 2 つにプライオリティを設定できます。

2 つのクラスのプライオリティを設定するには、**priority level** ポリシー クラスマップ コマンドを使用します。1 つのクラスにプライオリティ キュー レベル 1 を設定し、別のクラスにプライオリティ キュー レベル 2 を設定する必要があります。これら 2 つのキューの packets は、他のキューと比較して、低遅延になります。



- (注) プライオリティは1つのレベルのみ設定できます。
1つのポリシーマップで使用できる完全プライオリティまたはレベル付きプライオリティは1つだけです。kbps または割合のない同じプライオリティ レベルが設定された複数のプライオリティは、ポリシングですべてが設定された場合にのみ使用できます。

キューバッファ

ブート時に有線ポートでイネーブルになっているポリシーマップがない場合、デフォルトで作成される2つのキューがあります。有線ポートには、MQC ベースのポリシーを使用して最大8つのキューを設定できます。次の表に、どのパケットがどのキューに入っているかを示します。

表 6: DSCP、Precedence、CoS: キューのしきい値のマッピングテーブル

DSCP、Precedence、CoS	キュー (Queue)	しきい値 (Threshold)
制御パケット	[0]	2
他のパケット	1	2



- (注) バッファのアベイラビリティを保証し、ドロップしきい値を設定し、キューの最大メモリ割り当てを設定できます。キューバッファを設定するには、**queue-buffers** ポリシーマップクラス コマンドを使用します。最大しきい値を設定するには、**queue-limit** ポリシーマップクラス コマンドを使用します。

バッファ割り当ては2種類あります。キューに明示的に予約される厳格なバッファと、特定のポートで未使用時に他のポートで利用可能な柔軟なバッファです。

有線ポートのデフォルトでは、キュー 0 には、厳格なバッファとしてインターフェイスで利用可能なバッファの40%が割り当てられます。つまり、1ギガビットポートにおいては、キュー 0 に対して100 バッファが割り当てられ、10ギガビットポートにおいては、600 バッファが割り当てられます。このキューの柔軟な最大値は厳格なバッファの4倍に設定されます。つまり、1ギガビットポートの場合は400、10ギガビットポートの場合は2400、40ギガビットポートの場合は9600に設定されます。任意のキューの場合、デフォルトで設定される最大しきい値は400です。

キュー 1 に割り当てられた厳格なバッファはありません。柔軟なバッファの最小割り当ては、1ギガビットポートの場合は150 バッファ、10ギガビットポートの場合は900 バッファ、40ギガビットポートの場合は3600 バッファです。キュー 1 の柔軟なバッファの最大割り当ては、柔軟なバッファの最小割り当ての4倍に設定されます。つまり、1ギガビットポートの場合は600 バッファ、10ギガビットポートの場合は3600 バッファ、40ギガビットポートの場合は14400 バッファです。

キューバッファの割り当て

キューに対するバッファ割り当ては、**queue-buffers ratio** ポリシーマップクラスコンフィギュレーション コマンドを使用して調整できます。

ダイナミックなしきい値および拡張

従来、予約バッファは各キューに静的に割り当てられていました。キューがアクティブかどうかにかかわらず、バッファはキューに保持されます。さらに、キューの数が増えるに従って、各キューに割り当てられた予約バッファの部分が徐々に短くなる場合があります。最終的に、すべてのキューのジャンボフレームをサポートするのに十分な予約バッファがなくなる可能性があります。

デバイスは、バッファリソースを公平かつ効率的に割り当てる機能として、ダイナミックなしきい値および拡張 (DTS) をサポートしています。輻輳が発生すると、この DTS 機能はグローバル/ポートリソースの占有に基づいて、着信データにバッファを柔軟に割り当てます。概念上、DTS は、リソースを他のキューが使用できるように、キューバッファの割り当てを徐々に縮小します。逆も同様です。この柔軟な方法によって、バッファをより効率的かつ公平に利用できるようになります。

前の項で説明したように、キューには厳格な制限と柔軟な制限の2つの制限が設定されています。厳格な制限は DTS の一部ではありません。これらのバッファはそのキューにだけ使用できます。厳格な制限の合計は、グローバルに設定された厳格な最大制限未満である必要があります。出力キューイングのために設定されたグローバルな厳格な制限は、現在 5705 に設定されています。MQC ポリシーが設定されていない場合のデフォルトのシナリオでは、24 の 1 ギガビットポートが $24 \times 67 = 1608$ を、4 つの 10 ギガビットポートが $4 \times 720 = 2880$ を使用するため、バッファは合計で 4488 となり、設定に基づいてより厳格なバッファを割り当てることができます。

柔軟なバッファ制限は DTS プロセスに参加します。さらに、柔軟なバッファ割り当ての一部は、グローバルな柔軟な制限の割り当てを超えることができます。出力キューイング用のグローバルな柔軟な制限は、現在 27024 に設定されています。厳格な制限と柔軟な制限の合計は 39696 になり、10.1 MB に変換されます。柔軟なバッファ割り当ての合計がグローバルな制限を超える場合があるため、システムの負荷が軽ければ、特定のキューで多数のバッファを使用できるようになります。DTS プロセスはシステムの負荷が増大するにしたがって、キュー単位の割り当てを動的に調整します。

信頼動作

Cisco IP Phone の信頼境界機能のポートセキュリティ

一般的なネットワークでは、デバイスポートに Cisco IP Phone を接続し、電話の背後からデータパケットを生成するデバイスをカスケードします。Cisco IP Phone では、音声パケット CoS レベルをハイプライオリティ (CoS=5) にマーキングし、データパケットをロープライオリティ (CoS=0) にマーキングすることで、共有データリンクを通して音声品質を保証しています。電話から

デバイスに送信されたトラフィックは通常 802.1Q ヘッダーを使用するタグでマーキングされています。ヘッダーには VLAN 情報およびパケットのプライオリティになる CoS の 3 ビットフィールドが含まれています。

ほとんどの Cisco IP Phone 設定では、電話からデバイスに送信されるトラフィックは、音声トラフィックがネットワーク内の他のタイプのトラフィックに対して適切にプライオリティ付けがされていることを保証するように信頼されています。 **trust device** インターフェイス コンフィギュレーション コマンドを使用して、電話の接続先のデバイスポートが受信トラフィックを信頼するように設定します。



- (注) インターフェイス コンフィギュレーション モードで使用できる **trust device device_type** コマンドは、デバイス上ではスタンドアロンのコマンドです。このコマンドを AutoQoS 設定で使用するときに、接続されているピア デバイスが対応デバイス（信頼ポリシーに一致するデバイスとして定義されているデバイス）ではない場合、CoS 値と DSCP 値の両方が「0」に設定され、いずれの入力ポリシーも有効になりません。接続されているピア デバイスが対応するデバイスである場合は、入力ポリシーが有効になります。

信頼設定により、ユーザが電話をバイパスして PC を直接デバイスに接続する場合に、ハイプライオリティ キューの誤使用を避けるのにも信頼境界機能を使用できます。信頼境界機能を使用しないと、（信頼済みの CoS 設定により）PC が生成した CoS ラベルがデバイスで信頼されてしまいます。それに対して、信頼境界機能は CDP を使用してデバイス ポートにある Cisco IP Phone（Cisco IP Phone 7910、7935、7940、7960 など）の存在を検出します。電話が検出されない場合、信頼境界機能がハイプライオリティキューの誤使用を避けるためにデバイスポートの信頼設定をディセーブルにします。信頼境界機能は、PC および Cisco IP Phone がデバイスに接続されているハブに接続されている場合は機能しないことに注意してください。

有線 ポートの信頼動作

デバイス（IP 電話、ラップトップ、カメラ、テレプレゼンスユニットといったデバイスなどのエンドポイント）に接続された有線ポートでは、それらのエンドポイントからの DSCP 値、precedence 値、または CoS 値がデバイスによって信頼されるので、明示的なポリシー設定がない場合でも保持されます。

パケットはデフォルトの初期設定ごとに適切なキューに入れられます。デフォルトでは、デバイスでの優先キューイングは実行されません。これは、ユニキャストおよびマルチキャストパケットに当てはまります。

次の表に、着信パケットタイプが発信パケットタイプと異なる場合の信頼動作およびキューイング動作を示します。ポートのデフォルトの信頼モードが DSCP ベースであることに注意してください。信頼モードは、着信パケットが純粋なレイヤ 2 パケットの場合、CoS に「フォールバック」します。また、信頼設定を DSCP から CoS に変更できます。この設定変更は、「set cos cos table default default-cos」アクションのクラス デフォルトがある MQC ポリシーによって実現されます。ここで、default-cos は作成されるテーブル マップ名です（デフォルト コピーだけを実行）。

表 7: 信頼およびキューイング動作

着信パケット	発信パケット	信頼動作	キューイング動作
レイヤ 3	レイヤ 3	DSCP/Precedence の保持	DSCP に基づく
レイヤ 2	レイヤ 2	N/A	CoS に基づく
Tagged	Tagged	DSCP および CoS の保持	DSCP に基づく (信頼 DSCP が優先)
レイヤ 3	Tagged	DSCP の保持、すなわち CoS が 0 に設定される	DSCP に基づく

標準 QoS のデフォルト設定

デフォルトの有線 QoS 設定

デバイスの各有線インターフェイスでは、デフォルトで2つのキューが設定されます。すべての制御トラフィックはキュー 0 を通過し、処理されます。その他すべてのトラフィックはキュー 1 を通過し、処理されます。

DSCP マップ

デフォルトの CoS/DSCP マップ

DSCP 透過モードを無効にすると、DSCP 値は次の表に従って CoS から抽出されます。これらの値が使用しているネットワークに適さない場合は、値を変更する必要があります。

(注) DSCP 透過モードはデフォルトではディセーブルになっています。これがイネーブルになっている場合 (`mls qos rewrite ip dscp` インターフェイス コンフィギュレーション コマンド)、DSCP の書き換えは実行されません。

表 8: デフォルトの CoS/DSCP マップ

CoS 値	DSCP 値
[0]	[0]
1	8
2	16
3	24

CoS 値	DSCP 値
4	32
5	40
[6]	48
7	72

デフォルトの IP Precedence/DSCP マップ

着信パケットの IP precedence 値を、QoS がトラフィックのプライオリティを表すために内部使用する DSCP 値にマッピングするには、IP precedence/DSCP マップを使用します。次の表は、デフォルトの IP Precedence/DSCP マップを示しています。これらの値が使用しているネットワークに適さない場合は、値を変更する必要があります。

表 9: デフォルトの IP Precedence/DSCP マップ

IP precedence 値	DSCP 値
[0]	[0]
1	8
2	16
3	24
4	32
5	40
[6]	48
7	72

デフォルトの DSCP/CoS マップ

4つの出力キューのうち1つを選択するために使用される CoS 値を生成するには、DSCP/CoS マップを使用します。次の表に、デフォルトの DSCP/CoS マップを示します。これらの値が使用しているネットワークに適さない場合は、値を変更する必要があります。

表 10: デフォルトの DSCP/CoS マップ

DSCP 値	CoS 値
0 ~ 7	[0]
8 ~ 15	1
16 ~ 23	2
24 ~ 31	3
32 ~ 39	4
40 ~ 47	5
48 ~ 55	[6]
56 ~ 63	7

有線ターゲットの QoS に関する制約事項

ターゲットとは、ポリシーが適用されるエンティティです。有線ターゲットには、ポートまたは VLAN を指定できます。

次に、QoS 機能を有線ターゲットのデバイスに適用する場合の制限事項を示します。

- 有線ターゲットのデバイス ポートでは、最大 8 つのキューイング クラスがサポートされません。
- 有線ターゲットの有線ポートでは、ポリシーごとに最大 63 のポリサーがサポートされます。
- Cisco IOS XE Release 3.7.5E 以降のリリースでは、ダウンリンク ポートのサイズは 10 GB ですが、デフォルトでは、すべてのダウンリンク ポートに 1 GB のポートバッファが割り当てられます。この変更の前は、すべての 1 GB ダウンリンク ポートには 1 GB バッファが、10 GB ダウンリンク ポートには 10 GB バッファが割り当てられていました。
- 最大 1599 のポリシーマップを作成できます。
- QoS 階層でサポートされるのは最大 2 レベルです。
- 階層型ポリシーでは、子ポリシーの親およびキュー機能のポリシーにポートシェーパがある場合を除き、親子間のオーバーラップは許可されていません。
- QoS ポリシーは、EtherChannel インターフェイスに付加できません。
- 親と子の両方のポリシングは、QoS 階層ではサポートされていません。
- 親と子の両方のマーキングは、QoS 階層ではサポートされていません。

- 同じポリシーでのキュー制限とキュー バッファの混在はサポートされません。



(注) キュー制限の割合は、**queue-buffer** コマンドがこの機能を処理するため、デバイスではサポートされていません。キュー制限は、DSCP および CoS 拡張でのみサポートされます。

- シェーピングでは、ハードウェア内部に占める 20 バイトの IPG オーバーヘッドがすべてのパケットにあります。シェーピングの精度はこれにより向上し、とくに小さいサイズのパケットに対して効果があります。
- すべての有線キューイングベースポリシーの分類シーケンスはすべての有線アップストリームポート (10 ギガビットイーサネット) で同じであり、すべてのダウンストリーム有線ポート (1 ギガビットイーサネット) で同じです。
- 空のクラスはサポートされません。
- 空のアクションによるクラス マップはサポートされません。クラス マップの順序が同じポリシーが 2 つあり、どちらかのポリシーにアクションが含まれていないクラス マップがある場合、トラフィックのドロップが起こる可能性があります。回避策として、**PRIORITY_QUEUE** 内のすべてのクラスに最小帯域幅を割り当てます。
- 有線ターゲットの有線ポートでは、ポリシーごとに最大 256 のクラスがサポートされます。
- ポリシー マップ内のポリサーのアクションには、次の制限事項があります。
 - 適合アクションは送信する必要があります。
 - マークダウン タイプの超過/違反アクションは、**cos2cos**、**prec2prec**、**dscp2dscp** だけです。
 - マークダウン タイプはポリシー内で同じである必要があります。
- ポート レベルの入力マーキング ポリシーは **SVI** ポリシーより優先されますが、ポート ポリシーが設定されていない場合は、**SVI** ポリシーが優先されます。優先するポート ポリシーに対し、ポート レベルのポリシーを定義します。**SVI** ポリシーが上書きされるようにするためです。
- 分類カウンタには、次の制限事項があります。
 - 分類カウンタは、バイトの代わりにパケットをカウントします。
 - フィルタ ベースの分類カウンタはサポートされません。
 - マーキングまたはポリシングによる QoS 設定だけが、分類カウンタをトリガーします。
 - 分類カウンタはポート ベースではありません。これは、分類カウンタが、異なるインターフェイスに接続し、同じポリシーの同じクラスに属するすべてのパケットを集約することを意味します。
 - ポリシー内にポリシングまたはマーキングアクションがある限り、クラス デフォルトは分類カウンタを保持します。

- クラスに複数の **match** ステートメントがある場合、分類カウンタは **match** ステートメントの 1 つにだけトラフィック カウンタを表示します。
- テーブル マップには次の制限事項があります。
 - マークダウンを超過するポリシングのテーブルマップとマークダウンに違反するポリシングのテーブルマップがサポートされるのは、方向およびターゲットごとに 1 つのみです。
 - テーブル マップは **class-default** で設定する必要があります。テーブル マップはユーザ定義クラスに対してサポートされません。
- 階層型ポリシーは次の機能で必要になります。
 - ポート シェーパー
 - 集約ポリシング機能
 - PV ポリシー
 - 親シェーピングおよび子マーキング/ポリシング
- 有線ターゲットを含むポートでは、次の階層型ポリシーだけがサポートされています。
 - 同じポリシー内でのポリシングの連結はサポートされていません。
 - 同じポリシー内で階層型キューイングはサポートされていません（ポートシェーパーは例外）。
 - 親クラスでは、すべてのフィルタが同じタイプでなければなりません。子フィルタタイプは次の例外を除き、親フィルタのタイプと一致している必要があります。
 - IP に一致するように親クラスが設定されている場合、ACL に一致するように子クラスを設定できます。
 - CoS に一致するように親クラスが設定されている場合、ACL に一致するように子クラスを設定できます。
- インターフェイス コンフィギュレーション モードで使用可能な **trust device device_type** コマンドは、デバイスでのスタンドアロン コマンドです。このコマンドを **AutoQoS** 設定で使用するときに、接続されているピアデバイスが対応デバイス（信頼ポリシーに一致するデバイスとして定義されているデバイス）ではない場合、CoS 値と DSCP 値の両方が「0」に設定され、いずれの入力ポリシーも有効になりません。接続されているピアデバイスが対応するデバイスである場合は、入力ポリシーが有効になります。

次に、VLAN の QoS 機能を有線ターゲットに適用する場合の制限事項を示します。

- フラットつまり非階層型ポリシーでは、マーキングまたはテーブルマップのみサポートされます。

次に、EtherChannel とチャネルメンバーインターフェイスで QoS 機能を適用するための制限事項と考慮事項を示します。

- QoS は、EtherChannel インターフェイスではサポートされません。
- QoS は、入力および出力方向の EtherChannel メンバー インターフェイスでサポートされます。すべての EtherChannel メンバーが同じ QoS ポリシーを適用する必要があります。QoS ポリシーが同じでない場合、異なるリンクの個々のポリシーは独立して機能します。
- チャネルメンバーへサービスポリシーを付加すると、EtherChannel 内のすべてのポートに同じポリシーが接続されていることを確認するようユーザに知らせる、次の警告メッセージが表示されます。「Warning: add service policy will cause inconsistency with port xxx in ether channel xxx.」
- 自動 QoS は EtherChannel メンバーではサポートされません。



(注) EtherChannel へサービスポリシーを付加すると、次のメッセージがコンソールに表示されません。「Warning: add service policy will cause inconsistency with port xxx in ether channel xxx.」。この警告メッセージは予期されるメッセージです。この警告メッセージは、同じ EtherChannel 内の他のポートに同じポリシーを付加するように促すものです。同じメッセージがブートアップ中にも表示されます。このメッセージは、EtherChannel メンバーポート間に不一致があることを意味するものではありません。

QoS の設定方法

クラス、ポリシー、およびマップの設定

トラフィック クラスの作成

一致基準が含まれるトラフィック クラスを作成するには、**class-map** コマンドを使用してトラフィック クラス名を指定し、必要に応じて、**match** コマンドをクラスマップ コンフィギュレーション モードで使用します。

はじめる前に

この設定作業で指定するすべての **match** コマンドの使用は任意ですが、1つのクラスに少なくとも1つの一致基準を設定する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configureterminal 例 : Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	class-map class-map name { match-any match-all} 例 : Device (config)# class-map test_1000 Device (config-cmap)#	クラス マップ コンフィギュレーション モードを開始します。 <ul style="list-style-type: none"> 名前を指定したクラスとパケットとの照合に使用されるクラス マップを作成します。 match-any : トラフィック クラスで受信したトラフィックがその一部と分類されるには、一致基準のいずれかを満たす必要があります。 match-all : トラフィック クラスで受信したトラフィックがトラフィック クラスの一部と分類されるには、すべての一致基準を満たす必要があります。 (注) これがデフォルトです。 match-any または match-all が明示的に定義されていない場合は、デフォルトで match-all が選択されます。
ステップ 3	matchaccess-group {index number name} 例 : Device (config-cmap)# match access-group 100 Device (config-cmap)#	このコマンドでは次のパラメータを使用できません。 <ul style="list-style-type: none"> access-group class-map cos dscp [ip] non-client-nrt precedence qos-group vlan

	コマンドまたはアクション	目的
		<p>(任意) この例では、アクセスグループ ID を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • アクセスリストインデックス (1 ~ 2799 の値) • 名前付きアクセスリスト
ステップ 4	<p>matchclass-map <i>class-map name</i></p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-cmap) # match class-map test_2000 Device(config-cmap) #</pre>	(任意) 別のクラスマップ名に一致します。
ステップ 5	<p>match cos <i>cos value</i></p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-cmap) # match cos 2 3 4 5 Device(config-cmap) #</pre>	<p>(任意) IEEE 802.1Q または ISL サービスクラス (ユーザ) プライオリティ値に一致します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 最大 4 つの CoS 値 (0 ~ 7) をスペースで区切って入力します。
ステップ 6	<p>match dscp <i>dscp value</i></p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-cmap) # match dscp af11 af12 Device(config-cmap) #</pre>	(任意) IPv4 および IPv6 パケットの DSCP 値に一致します。
ステップ 7	<p>matchip {<i>dscp dscp value</i> <i>precedence precedence value</i> }</p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-cmap) # match ip dscp af11 af12 Device(config-cmap) #</pre>	<p>(任意) 次を含む IP 値に一致します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • dscp : IP DSCP (DiffServ コードポイント) に一致します。 • precedence : IP precedence (0 ~ 7) に一致します。 <p>(注) CPU 生成パケットは出力時にマークされないため、パケットは設定されたクラスマップと一致しません。</p>
ステップ 8	<p>matchqos-group <i>qos group value</i></p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-cmap) # match qos-group 10</pre>	(任意) QoS グループ値 (0 ~ 31) に一致します。

	コマンドまたはアクション	目的
	Device (config-cmap) #	
ステップ 9	matchvlan <i>vlan value</i> 例： Device (config-cmap) # match vlan 210 Device (config-cmap) #	(任意) VLAN ID (1 ~ 4095) に一致します。
ステップ 10	end 例： Device (config-cmap) # end	設定の変更内容を保存します。

次の作業

ポリシー マップを設定します。

トラフィック ポリシーの作成

トラフィック ポリシーを作成するには、**policy-map** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用して、トラフィック ポリシーの名前を指定します。

トラフィック クラスは、**class** コマンドを使用したときにサービス ポリシーと関連付けられます。**class** コマンドは、ポリシー マップ コンフィギュレーション モードを開始した後に実行する必要があります。**class** コマンドを入力すると、デバイスが自動的にポリシー マップ クラス コンフィギュレーション モードを開始します。ここでトラフィック ポリシーの QoS ポリシーを定義します。

次のポリシー マップ クラスのアクションがサポートされます。

- **bandwidth** : 帯域幅設定オプション。
- **exit** : QoS クラス アクション コンフィギュレーション モードを終了します。
- **no** : コマンドのデフォルト値を無効にするか、設定します。
- **police** : ポリシング機能の設定オプション。
- **priority** : このクラスの完全スケジューリング プライオリティの設定オプション。
- **queue-buffers** : キューのバッファ設定オプション。
- **queue-limit** : 重み付けテールドロップ (WTD) 設定オプションのキューの最大しきい値。
- **service-policy** : QoS サービス ポリシーを設定します。

- **set** : 次のオプションを使用して QoS 値を設定します。
 - CoS 値
 - DSCP 値
 - precedence 値
 - QoS グループ値
- **shape** : トラフィック シェーピング設定オプション。

はじめる前に

最初にクラス マップを作成する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : Device# configure terminal	グローバルコンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 2	policy-map policy-map name 例 : Device(config)# policy-map test_2000 Device(config-pmap)#	ポリシー マップ コンフィギュレーション モードを開始します。 1 つ以上のインターフェイスに対応付けることができるポリシー マップを作成または修正し、サービスポリシーを指定します。
ステップ 3	class {class-name class-default} 例 : Device(config-pmap)# class test_1000 Device(config-pmap-c)#	ポリシーを作成または変更するクラスの名前を指定します。 未分類のパケットのシステムデフォルトクラスも作成できます。
ステップ 4	bandwidth {kb/s kb/s value percent percentage remaining {percent ratio}} 例 : Device(config-pmap-c)# bandwidth 50 Device(config-pmap-c)#	(任意) 次のいずれかを使用して帯域幅を設定します。 <ul style="list-style-type: none"> • kb/s : kpbs に 20000 ~ 10000000 の値を入力します。 • percent : このポリシーマップに使用される総帯域幅の割合を入力します。 • remaining : 残りの帯域幅の割合を入力します。

	コマンドまたはアクション	目的
		このコマンドおよび使用の詳細な例については、 帯域幅の設定 、(57 ページ) を参照してください。
ステップ 5	exit 例： <pre>Device(config-pmap-c)# exit Device(config-pmap-c)#</pre>	(任意) QoS クラス アクション コンフィギュレーション モードを終了します。
ステップ 6	no 例： <pre>Device(config-pmap-c)# no Device(config-pmap-c)#</pre>	(任意) コマンドを無効にします。
ステップ 7	police {target_bit_rate cir rate} 例： <pre>Device(config-pmap-c)# police 100000 Device(config-pmap-c)#</pre>	(任意) ポリサーを設定します。 <ul style="list-style-type: none"> • target_bit_rate : ビットレート/秒を入力します。8000 ~ 10000000000 の値を入力します。 • cir : 認定情報レート。 • rate : ポリシング レート、階層型ポリシーの PCR、またはシングルレベルの ATM 4.0 ポリサー ポリシーの SCR を指定します。 このコマンドおよび使用の詳細な例については、 ポリシングの設定 、(59 ページ) を参照してください。
ステップ 8	priority {kb/s level level value percent percentage value} 例： <pre>Device(config-pmap-c)# priority percent 50 Device(config-pmap-c)#</pre>	(任意) このクラスに完全スケジューリング プライオリティを設定します。コマンドオプションは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • kb/s : kbps に 1 ~ 2000000 の値を入力します。 • level : マルチレベルプライオリティキューを確立します。値を入力します (1 または 2) 。 • percent : このプライオリティの全帯域幅の割合を入力します。 このコマンドおよび使用の詳細な例については、 プライオリティの設定 、(62 ページ) を参照してください。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 9	queue-buffers ratio ratio limit 例 : <pre>Device(config-pmap-c) # queue-buffers ratio 10 Device(config-pmap-c) #</pre>	(任意) クラスのキューバッファを設定します。キューバッファの割合制限 (0 ~ 100) を入力します。 このコマンドおよび使用の詳細な例については、 キューバッファの設定, (64 ページ) を参照してください。
ステップ 10	queue-limit {packets: パケット数 cos dscp percent} 例 : <pre>Device(config-pmap-c) # queue-limit cos 7 percent 50 Device(config-pmap-c) #</pre>	(任意) テールドロップに対してキューの最大しきい値を指定します。 <ul style="list-style-type: none"> • packets : デフォルトのパケット数。1 ~ 2000000 の間の値を入力します。 • cos : 各 CoS 値のパラメータを入力します。 • dscp : 各 DSCP 値のパラメータを入力します。 • percent : しきい値の割合を入力します。 このコマンドおよび使用の詳細な例については、 キュー制限の設定, (67 ページ) を参照してください。
ステップ 11	service-policy policy-map name 例 : <pre>Device(config-pmap-c) # service-policy test 2000 Device(config-pmap-c) #</pre>	(任意) QoS サービスポリシーを設定します。
ステップ 12	set {cos dscp ip precedence qos-group wlan} 例 : <pre>Device(config-pmap-c) # set cos 7 Device(config-pmap-c) #</pre>	(任意) QoS 値を設定します。使用可能な QoS 設定値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • cos : IEEE 802.1Q/ISL サービスクラスまたはユーザプライオリティを設定します。 • dscp : IP (v4) および IPv6 パケットの DSCP を設定します。 • ip : IP 固有の値を設定します。 • precedence : IP (v4) および IPv6 パケットの precedence を設定します。 • qos-group : QoS グループを設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 13	shape average { <i>target_bit_rate</i> percent } 例 : Device(config-pmap-c) # shape average percent 50 Device(config-pmap-c) #	(任意) トラフィックシェーピングを設定します。 コマンドパラメータは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • <i>target_bit_rate</i> : ターゲットビットレート。 • percent : 認定情報レートのインターフェイス帯域幅の割合。 このコマンドおよび使用の詳細な例については、 シェーピングの設定, (70 ページ) を参照してください。
ステップ 14	end 例 : Device(config-pmap-c) # end Device(config-pmap-c) #	設定の変更内容を保存します。

次の作業

インターフェイスを設定します。

クラスベースパケットマーキングの設定

この手順は、次のクラスベースパケットマーキング機能をデバイスで設定する方法を示します。

- CoS 値
- DSCP 値
- IP 値
- precedence 値
- QoS グループ値

はじめる前に

この手順を開始する前にクラスマップとポリシーマップを作成する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configureterminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	policy-map policy name 例： Device (config) # policy-map policy1 Device (config-pmap) #	ポリシー マップ コンフィギュレーション モードを開始します。 1 つ以上のインターフェイスに対応付けることができるポリシー マップを作成または修正し、サービス ポリシーを指定します。
ステップ 3	class class name 例： Device (config-pmap) # class class1 Device (config-pmap-c) #	ポリシー クラス マップ コンフィギュレーション モードを開始します。ポリシーを作成または変更するクラスの名前を指定します。 ポリシー クラス マップ コンフィギュレーション モードには、次のコマンド オプションが含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> • bandwidth : 帯域幅設定オプション。 • exit : QoS クラス アクション コンフィギュレーション モードを終了します。 • no : コマンドのデフォルト値を無効にするか、設定します。 • police : ポリシング機能の設定オプション。 • priority : このクラスの完全スケジューリングプライオリティの設定オプション。 • queue-buffers : キューのバッファ設定オプション。 • queue-limit : 重み付けテールドロップ (WTD) 設定オプションのキューの最大しきい値。 • service-policy : QoS サービス ポリシーを設定します。 • set : 次のオプションを使用して QoS 値を設定します。 <ul style="list-style-type: none"> ◦ CoS 値 ◦ DSCP 値 ◦ precedence 値

	コマンドまたはアクション	目的
		<p>° QoS グループ値</p> <ul style="list-style-type: none"> • shape : トラフィック シェーピング設定オプション。 <p>(注) この手順では、set コマンドオプションを使用して、使用可能な設定について説明します。その他のコマンドオプション (admit、bandwidth など) についてはこのマニュアルの他の項で説明します。このタスクでは、使用可能なすべての set コマンドが表示されますが、クラス単位でサポートされるのは1つの set コマンドだけです。</p>
ステップ4	<p>例 :</p> <pre>Device(config-pmap) # set cos 5 Device(config-pmap) #</pre>	<p>(任意) 発信パケットの固有の IEEE 802.1Q レイヤ2 CoS 値を設定します。値は 0 ~ 7 です。</p> <p>set cos コマンドを使用して次の値を設定することもできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • cos table : CoS 値をテーブルマップに基づいて設定します。 • dscp table : コードポイント値をテーブルマップに基づいて設定します。 • precedence table : コードポイント値をテーブルマップに基づいて設定します。 • qos-group table : テーブルマップに基づいて QoS グループから CoS 値を設定します。
ステップ5	<p>例 :</p> <pre>Device(config-pmap) # set dscp af11 Device(config-pmap) #</pre>	<p>(任意) DSCP 値を設定します。</p> <p>特定の DSCP 値の設定に加えて、set dscp コマンドを使用して次を設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • default : パケットをデフォルト DSCP 値 (000000) と一致させます。 • dscp table : テーブルマップに基づいて DSCP からパケットの DSCP 値を設定します。 • ef : パケットを EF DSCP 値 (101110) と一致させます。 • precedence table : テーブルマップに基づいて優先順位からパケットの DSCP 値を設定します。 • qos-group table : テーブルマップに基づいて QoS グループからパケットの DSCP 値を設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 6	<p>set ip {dscp precedence}</p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-pmap) # set ip dscp c3 Device(config-pmap) #</pre>	<p>(任意) IP 固有の値を設定します。これらの値は、IP DSCP 値または IP precedence 値です。</p> <p>set ip dscp コマンドを使用して、次の値を設定することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>dscp value</i> : 特定の DSCP の値を設定します。 • default : パケットをデフォルト DSCP 値 (000000) と一致させます。 • dscp table : テーブルマップに基づいて DSCP からパケットの DSCP 値を設定します。 • ef : パケットを EF DSCP 値 (101110) と一致させます。 • precedence table : テーブルマップに基づいて優先順位からパケットの DSCP 値を設定します。 • qos-group table : テーブルマップに基づいて QoS グループからパケットの DSCP 値を設定します。 <p>set ip precedence コマンドを使用して、次の値を設定することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>precedence value</i> : precedence 値を設定します (0 ~ 7)。 • cos table : テーブルマップに基づいてレイヤ 2 CoS からパケットの precedence 値を設定します。 • dscp table : テーブルマップに基づいて DSCP 値からパケットの precedence 値を設定します。 • precedence table : テーブルマップに基づいて優先順位から precedence 値を設定します。 • qos-group table : テーブルマップに基づいて QoS グループから precedence 値を設定します。
ステップ 7	<p>set precedence <pre>{precedence value cos table table-map name dscp table table-map name precedence table table-map name qos-group table table-map name}</pre></p>	<p>(任意) IPv4 と IPv6 パケットの precedence 値を設定します。</p> <p>set precedence コマンドを使用して、次の値を設定することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>precedence value</i> : precedence 値を設定します (0 ~ 7)。 • cos table : レイヤ 2 CoS からのパケットの precedence 値をテーブルマップに基づいて設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
	例 : <pre>Device(config-pmap) # set precedence 5 Device(config-pmap) #</pre>	<ul style="list-style-type: none"> • dscp table : テーブルマップに基づいて DSCP 値からパケットの precedence 値を設定します。 • precedence table : テーブルマップに基づいて優先順位から precedence 値を設定します。 • qos-group table : テーブルマップに基づいて QoS グループから precedence 値を設定します。
ステップ 8	set qos-group {qos-group value dscp table table-map name precedence table table-map name} 例 : <pre>Device(config-pmap) # set qos-group 10 Device(config-pmap) #</pre>	(任意) QoS グループ値を設定します。このコマンドを使用して次の値を設定できます。 <ul style="list-style-type: none"> • qos-group value : 1 から 31 までの数。 • dscp table : テーブルマップに基づいて DSCP からコードポイント値を設定します。 • precedence table : テーブルマップに基づいて優先順位からコードポイント値を設定します。
ステップ 9	end 例 : <pre>Device(config-pmap) # end Device#</pre>	設定変更を保存します。
ステップ 10	show policy-map 例 : <pre>Device# show policy-map</pre>	(任意) すべてのサービス ポリシーに設定されたすべてのクラスに関するポリシー設定情報を表示します。

次の作業

service-policy コマンドを使用して、インターフェイスにトラフィック ポリシーを付加します。

トラフィック ポリシーのインターフェイスへの適用

トラフィック クラスとトラフィック ポリシーの作成後、**service-policy** インターフェイス コンフィギュレーションコマンドを使用して、トラフィック ポリシーをインターフェイスに付加し、ポリシーを適用する方向を指定します (インターフェイスに着信するパケットまたはインターフェイスから送信されるパケット)。

はじめる前に

インターフェイスにトラフィックポリシーを付加する前に、トラフィッククラスとトラフィックポリシーを作成する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configureterminal 例： Device# configure terminal	グローバルコンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 2	interface type 例： Device (config) # interface GigabitEthernet1/0/1 Device (config-if) #	インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始し、インターフェイスを設定します。 インターフェイス コンフィギュレーションのコマンドパラメータは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • ANI : 自律型ネットワーク仮想インターフェイス • AccessTunnel : アクセス トンネル インターフェイス • Auto Template : 自動テンプレート インターフェイス • CEM-PG : 保護グループを持つ回線エミュレーション インターフェイス • FortyGigabitEthernet : 40 ギガビット イーサネット • GigabitEthernet : Gigabit Ethernet IEEE 802.3z • Internal Interface : 内部インターフェイス • LISP : ロケータ ID 分離プロトコル仮想インターフェイス • Loopback : ループバック インターフェイス • Null : ヌル インターフェイス • PROTECTION_GROUP : 保護グループ コントローラ • Port-channel : インターフェイスのイーサネットチャネル • SDH_ACR : 仮想 SDH-ACR コントローラ • TLS-VIF : TLS 仮想インターフェイス

	コマンドまたはアクション	目的
		<ul style="list-style-type: none"> • TenGigabitEthernet : 10 ギガビットイーサネット • Tunnel : トンネルインターフェイス • Vlan : Catalyst VLAN • Range : インターフェイス範囲
ステップ 3	service-policy {input policy-map output policy-map } 例 : <pre>Device(config-if)# service-policy output policy_map_01 Device(config-if)#</pre>	ポリシー マップを入力または出力インターフェイスに適用します。このポリシー マップは、そのインターフェイスのサービス ポリシーとして使用されます。 この例では、トラフィック ポリシーでそのインターフェイスから送信されるすべてのトラフィックを評価します。
ステップ 4	end 例 : <pre>Device(config-if)# end Device#</pre>	設定変更を保存します。
ステップ 5	show policy map 例 : <pre>Device# show policy map</pre>	(任意) 指定されたインターフェイスのポリシーの統計情報を表示します。

次の作業

他のトラフィック ポリシーをインターフェイスに付加し、ポリシーを適用する方向を指定します。

ポリシーマップによる物理ポートのトラフィックの分類、ポリシング、およびマーキング

実行対象となるトラフィッククラスを指定する非階層型ポリシーマップを、物理ポート上に設定できます。サポートされるアクションは再マーキングとポリシングです。

はじめる前に

この手順を開始する前に、ネットワークトラフィックの分類、ポリシー、およびマーキングについて、あらかじめポリシーマップによって決定しておく必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	class-map {class-map name match-any} 例： Device (config)# class-map ipclass1 Device (config-cmap)# exit Device (config)#	クラス マップ コンフィギュレーション モードを開始します。 <ul style="list-style-type: none"> • 名前を指定したクラスとパケットとの照合に使用されるクラス マップを作成します。 • match-any を指定すると、トラフィック クラスで受信したトラフィックの場合、一致基準の1つに必ず一致し、そのトラフィック クラスの一部と分類されます。これがデフォルトです。
ステップ 3	match access-group { access list index access list name } 例： Device (config-cmap)# match access-group 1000 Device (config-cmap)# exit Device (config)#	分類基準をクラス マップに一致するように指定します。次の基準について照合できます。 <ul style="list-style-type: none"> • access-group : アクセス グループに一致します。 • class-map : 別のクラス マップに一致します。 • cos : CoS 値に一致します。 • dscp : DSCP 値に一致します。 • ip : 特定の IP 値に一致します。 • non-client-nrt : 非クライアント NRT に一致します。 • precedence : IPv4 および IPv6 パケットの precedence 値に一致します。 • qos-group : QoS グループに一致します。 • vlan : VLAN に一致します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	<p>policy-map <i>policy-map-name</i></p> <p>例 :</p> <pre>Device(config)# policy-map flowit Device(config-pmap)#</pre>	<p>ポリシー マップ名を入力することによってポリシー マップを作成し、ポリシーマップ コンフィギュレーション モードを開始します。</p> <p>デフォルトでは、ポリシーマップは定義されていません。</p>
ステップ 5	<p>class {<i>class-map-name</i> class-default}</p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-pmap)# class ipclass1 Device(config-pmap-c)#</pre>	<p>トラフィックの分類を定義し、ポリシーマップクラス コンフィギュレーション モードを開始します。</p> <p>デフォルトでは、ポリシー マップ クラス マップは定義されていません。</p> <p>すでに class-map グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用してトラフィック クラスが定義されている場合は、このコマンドで <i>class-map-name</i> にその名前を指定します。</p> <p>class-default トラフィック クラスは定義済みで、どのポリシーにも追加できます。このトラフィッククラスは、常にポリシーマップの最後に配置されます。暗黙の match any が class-default クラスに含まれている場合、他のトラフィッククラスと一致していないすべてのパケットは class-default と一致します。</p>
ステップ 6	<p>set {<i>cos</i> <i>dscp</i> <i>ip</i> <i>precedence</i> <i>qos-group</i> <i>wlan user-priority</i>}</p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-pmap-c)# set dscp 45 Device(config-pmap-c)#</pre>	<p>(任意) QoS 値を設定します。使用可能な QoS 設定値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • cos : IEEE 802.1Q/ISL サービス クラスまたはユーザ プライオリティを設定します。 • dscp : IP (v4) および IPv6 パケットの DSCP を設定します。 • ip : IP 固有の値を設定します。 • precedence : IP (v4) および IPv6 パケットの precedence を設定します。 • qos-group : QoS グループを設定します。 <p>この例では、set dscp コマンドが、パケットでの新しい DSCP 値を設定して IP トラフィックを分類します。</p>
ステップ 7	<p>police {<i>target_bit_rate</i> <i>cir</i> <i>rate</i>}</p>	<p>(任意) ポリサーを設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • target_bit_rate : ビット レート/秒を指定し、8000 ~ 10000000000 の値を入力します。

	コマンドまたはアクション	目的
	例 : <pre>Device(config-pmap-c) # police 100000 conform-action transmit exceed-action drop Device(config-pmap-c) #</pre>	<ul style="list-style-type: none"> • cir : 認定情報レート。 • rate : ポリシング レート、階層型ポリシーの PCR、またはシングルレベルの ATM4.0 ポリサーポリシーの SCR を指定します。 <p>この例では、police コマンドが 100000 セットのターゲット ビット レートを超えるトラフィックがドロップされるクラスにポリサーを追加します。</p>
ステップ 8	exit 例 : <pre>Device(config-pmap-c) # exit</pre>	ポリシー マップ コンフィギュレーション モードに戻ります。
ステップ 9	exit 例 : <pre>Device(config-pmap) # exit</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードに戻ります。
ステップ 10	interface interface-id 例 : <pre>Device(config) # interface gigabitethernet 2/0/1</pre>	<p>ポリシーマップを適用するポートを指定し、インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始します。</p> <p>有効なインターフェイスには、物理ポートが含まれます。</p>
ステップ 11	service-policy input <i>policy-map-name</i> 例 : <pre>Device(config-if) # service-policy input flowit</pre>	ポリシー マップ名を指定し、入力ポートに適用します。サポートされるポリシーマップは、入力ポートに 1 つだけです。
ステップ 12	end 例 : <pre>Device(config-if) # end</pre>	特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 13	show policy-map <i>[policy-map-name [class</i> <i>class-map-name]]</i>	(任意) 入力を確認します。

	コマンドまたはアクション	目的
	例 : Device# show policy-map	
ステップ 14	copy running-config startup-config 例 : Device# copy-running-config startup-config	(任意) コンフィギュレーションファイルに設定を保存します。

次の作業

必要に応じて QoS 設定は、ポリシー マップを使用して、SVI のトラフィックの分類、ポリシング、およびマーキングを設定します。

ポリシー マップによる SVI のトラフィックの分類、ポリシング、およびマーキング

はじめる前に

この手順を開始する前に、ポリシー マップを使用して、ネットワークトラフィックの分類、ポリシング、およびマーキングについて決定しておく必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configureterminal 例 : Device# configure terminal	グローバルコンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 2	class-map {class-map name match-any} 例 : Device (config) # class-map class_vlan100	クラス マップ コンフィギュレーション モードを開始します。 <ul style="list-style-type: none"> • 名前を指定したクラスとパケットとの照合に使用されるクラス マップを作成します。 • match-any を指定すると、トラフィック クラスで受信したトラフィックの場合、一致基準の 1

	コマンドまたはアクション	目的
		つに必ず一致し、そのトラフィッククラスの一部分と分類されます。これがデフォルトです。
ステップ 3	match vlan <i>vlan number</i> 例 : Device(config-cmap) # match vlan 100 Device(config-cmap) # exit Device(config) #	VLAN をクラス マップに一致するように指定します。
ステップ 4	policy-map <i>policy-map-name</i> 例 : Device(config) # policy-map policy_vlan100 Device(config-pmap) #	ポリシーマップ名を入力することによってポリシーマップを作成し、ポリシーマップコンフィギュレーション モードを開始します。 デフォルトでは、ポリシーマップは定義されていません。
ステップ 5	description 説明 例 : Device(config-pmap) # description vlan 100	(任意) ポリシー マップの説明を入力します。
ステップ 6	class { <i>class-map-name</i> class-default } 例 : Device(config-pmap) # class class_vlan100 Device(config-pmap-c) #	トラフィック分類を定義し、ポリシーマップクラスコンフィギュレーションモードを開始します。 デフォルトでは、ポリシー マップ クラス マップは定義されていません。 すでに class-map グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用してトラフィッククラスが定義されている場合は、このコマンドで <i>class-map-name</i> にその名前を指定します。 class-default トラフィック クラスは定義済みで、どのポリシーにも追加できます。このトラフィッククラスは、常にポリシー マップの最後に配置されます。暗黙の match any が class-default クラスに含まれている場合、他のトラフィッククラスと一致していないすべてのパケットは class-default と一致します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 7	<p>set {cos dscp ip precedence qos-group wlan user-priority}</p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-pmap-c) # set dscp af23 Device(config-pmap-c) #</pre>	<p>(任意) QoS 値を設定します。使用可能な QoS 設定値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • cos : IEEE 802.1Q/ISL サービス クラスまたは ユーザ プライオリティを設定します。 • dscp : IP (v4) および IPv6 パケットの DSCP を設定します。 • ip : IP 固有の値を設定します。 • precedence : IP (v4) および IPv6 パケットの precedence を設定します。 • qos-group : QoS グループを設定します。 <p>この例では、set dscp コマンドが AF23 (010010) の DSCP 値にパケットを照合することによって、IP トラフィックを分類します。</p>
ステップ 8	<p>police {target_bit_rate cir rate}</p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-pmap-c) # police 200000 conform-action transmit exceed-action drop Device(config-pmap-c) #</pre>	<p>(任意) ポリサーを設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • target_bit_rate : ビット レート/秒を指定します。8000 から 10000000000 までの値を入力してください。 • cir : 認定情報レート。 • rate : ポリシング レート、階層型ポリシーの PCR、またはシングルレベルの ATM 4.0 ポリサー ポリシーの SCR を指定します。 <p>この例では、police コマンドが 200000 セットのターゲットビットレートを超えるトラフィックがドロップされるクラスにポリサーを追加します。</p>
ステップ 9	<p>exit</p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-pmap-c) # exit</pre>	<p>ポリシー マップ コンフィギュレーション モードに戻ります。</p>
ステップ 10	<p>exit</p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-pmap) # exit</pre>	<p>グローバル コンフィギュレーション モードに戻ります。</p>

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 11	interface <i>interface-id</i> 例： Device(config)# interface gigabitethernet 1/0/3	ポリシー マップを適用するポートを指定し、インターフェイス コンフィギュレーションモードを開始します。 有効なインターフェイスには、物理ポートが含まれます。
ステップ 12	service-policy input <i>policy-map-name</i> 例： Device(config-if)# service-policy input policy_vlan100	ポリシーマップ名を指定し、入力ポートに適用します。サポートされるポリシーマップは、入力ポートに1つだけです。
ステップ 13	end 例： Device(config-if)# end	特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 14	show policy-map <i>[policy-map-name [class</i> <i>class-map-name]]</i> 例： Device# show policy-map	(任意) 入力を確認します。
ステップ 15	copy running-config startup-config 例： Device# copy-running-config startup-config	(任意) コンフィギュレーションファイルに設定を保存します。

テーブル マップの設定

テーブル マップはマーキングの形式であり、テーブルを使用してフィールド間のマッピングと変換を可能にすることもできます。たとえば、テーブル マップはレイヤ 2 の CoS 設定をレイヤ 3 の precedence 値にマッピングして変換するために使用できます。



(注) テーブル マップは、複数のポリシーで、または同じポリシー内で複数回参照できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configureterminal 例 : Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	table-map name {default {default value copy ignore} exit map {from from value to value } no} 例 : Device(config)# table-map table01 Device(config-tablemap)#	テーブルマップを作成し、テーブルマップ コンフィギュレーション モードを開始します。テーブルマップ コンフィギュレーション モードでは、次のタスクを実行できます。 <ul style="list-style-type: none"> • default : テーブル マップのデフォルト値を設定するか、テーブル マップ内にない値についてのデフォルトの動作（コピーまたは無視）を設定します。 • exit : テーブル マップ コンフィギュレーション モードを終了します。 • map : テーブルマップで <i>from</i> 値を <i>to</i> 値にマッピングします。 • no : コマンドのデフォルト値を無効にするか、設定します。
ステップ 3	mapfrom value to value 例 : Device(config-tablemap)# map from 0 to 2 Device(config-tablemap)# map from 1 to 4 Device(config-tablemap)# map from 24 to 3 Device(config-tablemap)# map from 40 to 6 Device(config-tablemap)# default 0 Device(config-tablemap)#	この手順では、DSCP 値が 0 のパケットを CoS 値 2 に、DSCP 値が 1 のパケットを CoS 値 4 に、DSCP 値が 24 のパケットを CoS 値 3 に、DSCP 値が 40 のパケットを CoS 値 6 に、およびそれ以外のすべてのパケットを CoS 値 0 にマークします。 (注) この例の CoS 値から DSCP 値へのマッピングは、後で説明するように、 set ポリシー マップ クラス コンフィギュレーション コマンドを使用して設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	exit 例 : Device (config-tablemap) # exit Device (config) #	グローバル コンフィギュレーション モードに戻ります。
ステップ 5	exit 例 : Device (config) exit Device#	特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 6	show table-map 例 : Device# show table-map Table Map table01 from 0 to 2 from 1 to 4 from 24 to 3 from 40 to 6 default 0	テーブル マップ設定を表示します。
ステップ 7	configureterminal 例 : Device# configure terminal Device (config) #	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 8	policy-map 例 : Device (config) # policy-map table-policy Device (config-pmap) #	テーブル マップのポリシー マップを設定します。
ステップ 9	class class-default 例 : Device (config-pmap) # class class-default Device (config-pmap-c) #	クラスをシステムデフォルトに一致させます。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 10	set cos dscp table table map name 例 : Device(config-pmap-c)# set cos dscp table table01 Device(config-pmap-c)#	このポリシーが入力ポートに適用された場合、そのポートでは trust dscp がイネーブルになり、テーブル マップに応じてマーキングが行われます。
ステップ 11	end 例 : Device(config-pmap-c)# end Device#	特権 EXEC モードに戻ります。

次の作業

ネットワークの QoS 用の追加のポリシー マップを設定します。ポリシー マップを作成したら、**service-policy** コマンドを使用してトラフィック ポリシーまたはポリシーをインターフェイスに付加します。

QoS の特性と機能の設定

帯域幅の設定

この手順は、で帯域幅を設定する方法を示します。

はじめる前に

この手順を開始する前に、帯域幅のクラス マップを作成する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configureterminal 例 : Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	<p>policy-map <i>policy name</i></p> <p>例 :</p> <pre>Device(config)# policy-map policy_bandwidth01 Device(config-pmap)#</pre>	<p>ポリシー マップ コンフィギュレーション モードを開始します。</p> <p>1 つ以上のインターフェイスに対応付けることができるポリシーマップを作成または修正し、サービスポリシーを指定します。</p>
ステップ 3	<p>class <i>class name</i></p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-pmap)# class class_bandwidth01 Device(config-pmap-c)#</pre>	<p>ポリシー クラス マップ コンフィギュレーション モードを開始します。ポリシーを作成または変更するクラスの名前を指定します。ポリシー クラス マップ コンフィギュレーション モードには、次のコマンド オプションが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • word : クラス マップ名。 • class-default : 未分類の packets を照合するシステム デフォルト クラス。
ステップ 4	<p>bandwidth {<i>Kb/s</i> percent <i>percentage</i> remaining {<i>ratio</i> <i>ratio</i> }}</p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-pmap-c)# bandwidth 200000 Device(config-pmap-c)#</pre>	<p>ポリシーマップの帯域幅を設定します。パラメータは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Kb/s : 特定の値を kbps で設定します (20000 ~ 10000000) 。 • percent- : 割合に基づいて、特定のクラスに最小帯域幅を割り当てます。キューは、他のキューが全体のポート帯域幅を使用しない場合は、帯域幅をオーバーサブスクライブすることができます。合計が 100 % を超えることはできません。100 % 未満の場合、帯域幅の残りは、すべての帯域幅キュー上に均等に分割されます。 • remaining : 特定のクラスに最小帯域幅を割り当てます。キューは、他のキューが全体のポート帯域幅を使用しない場合は、帯域幅をオーバーサブスクライブすることができます。合計が 100 % を超えることはできません。このコマンドは、ポリシー内の特定のキューに対して priority コマンドが使用されている場合に使用します。各キューには、割合ではなく比率を割り当てることもできます。キューにはそれらの比率に従って、特定の重みが割り当てられます。比率は 0 ~ 100 の範囲で指定できます。この場合のポリシーの全帯域幅での比率の割り当ては、100 を超えることができます。

	コマンドまたはアクション	目的
		(注) ポリシー マップで帯域幅タイプを混在させることはできません。たとえば、1つのポリシーマップで帯域幅の割合と kbps の両方を使用して、帯域幅を設定することはできません。
ステップ 5	end 例： Device(config-pmap-c) # end Device#	設定変更を保存します。
ステップ 6	show policy-map 例： Device# show policy-map	(任意) すべてのサービスポリシーに設定されたすべてのクラスに関するポリシー設定情報を表示します。

次の作業

ネットワークの QoS 用の追加のポリシー マップを設定します。ポリシー マップを作成したら、**service-policy** コマンドを使用して、インターフェイスにトラフィック ポリシーを付加します。

ポリシングの設定

この手順は、でポリシングを設定する方法を説明しています。

はじめる前に

この手順を開始する前に、ポリシングのクラス マップを作成する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configureterminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	<p>policy-map <i>policy name</i></p> <p>例 :</p> <pre>Device(config)# policy-map policy_police01 Device(config-pmap)#</pre>	<p>ポリシーマップ コンフィギュレーションモードを開始します。</p> <p>1つ以上のインターフェイスに対応付けることができるポリシー マップを作成または修正し、サービス ポリシーを指定します。</p>
ステップ 3	<p>class <i>class name</i></p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-pmap)# class class_police01 Device(config-pmap-c)#</pre>	<p>ポリシー クラス マップ コンフィギュレーションモードを開始します。ポリシーを作成または変更するクラスの名前を指定します。ポリシー クラス マップ コンフィギュレーションモードには、次のコマンド オプションが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • word : クラス マップ名。 • class-default : 未分類のパケットを照合するシステム デフォルト クラス。
ステップ 4	<p>police {<i>target_bit_rate</i> [<i>burst bytes</i> bc conform-action pir] cir {<i>target_bit_rate</i> percent percentage} rate {<i>target_bit_rate</i> percent percentage}</p> <p>conform-action transmit exceed-action {drop [violate action] set-cos-transmit set-dscp-transmit set-prec-transmit transmit [violate action] }</p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-pmap-c)# police 8000 conform-action transmit exceed-action drop Device(config-pmap-c)#</pre>	<p>次の police サブコマンド オプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • target_bit_rate : ビット/秒 (8000 ~ 10000000000) 。 <ul style="list-style-type: none"> ◦ <i>burst bytes</i> : 1000 ~ 512000000 の値を入力します。 ◦ bc : 適合バースト。 ◦ conform-action : レートが適合バーストより小さくなる場合に実行されるアクション。 ◦ pir : 最大情報レート。 • cir : 認定情報レート。 <ul style="list-style-type: none"> ◦ <i>target_bit_rate</i> : ターゲット ビット レート (8000 ~ 10000000000) 。 ◦ percent : CIR のインターフェイス帯域幅の割合。 • rate : ポリシング レート、階層型ポリシーの PCR、またはシングルレベルの ATM 4.0 ポリサー ポリシーの SCR を指定します。

	コマンドまたはアクション	目的
		<ul style="list-style-type: none"> ° <i>target_bit_rate</i> : ターゲット ビット レート (8000 ~ 10000000000)。 ° percent : レートのインターフェイス帯域幅の割合。 <p>次の police conform-action transmit exceed-action サブコマンド オプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • drop : パケットをドロップします。 • set-cos-transmit : CoS 値を設定して送信します。 • set-dscp-transmit : DSCP 値を設定して送信します。 • set-prec-transmit : パケットの precedence を書き換えて送信します。 • transmit : パケットを送信します。 <p>(注) ポリサーベースのマークダウンアクションは、テーブルマップを使用する場合のみサポートされます。内の各マーキングフィールドでは、1つのマークダウンテーブルマップだけが許可されます。</p>
ステップ5	end 例 : Device(config-pmap-c) # end Device#	設定変更を保存します。
ステップ6	show policy-map 例 : Device# show policy-map	(任意) すべてのサービス ポリシーに設定されたすべてのクラスに関するポリシー設定情報を表示します。 (注) show policy-map コマンドの出力では、適合バイトおよび超過バイトのカウンタを表示しません。

次の作業

ネットワークの QoS 用の追加のポリシー マップを設定します。ポリシー マップを作成したら、**service-policy** コマンドを使用してトラフィック ポリシーまたはポリシーをインターフェイスに付加します。

プライオリティの設定

次に、デバイスで優先順位を設定する手順を示します。

デバイスでは、指定されたキューに優先順位を指定できます。使用可能な 2 つのプライオリティ レベルがあります (1 および 2)。



(注) 音声とビデオに対応するキューには、プライオリティ レベル 1 を割り当てます。

はじめる前に

この手順を開始する前に、プライオリティのクラス マップを作成する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configureterminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	policy-map policy name 例： Device (config)# policy-map policy_priority01 Device (config-pmap)#	ポリシーマップ コンフィギュレーション モードを開始します。 1 つ以上のインターフェイスに対応付けることができるポリシー マップを作成または修正し、サービス ポリシーを指定します。
ステップ 3	class class name 例： Device (config-pmap)# class class_priority01 Device (config-pmap-c)#	ポリシー クラス マップ コンフィギュレーション モードを開始します。ポリシーを作成または変更するクラスの名前を指定します。ポリシー クラス マップ コンフィギュレーション モードには、次のコマンドオプションが含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> • word : クラス マップ名。 • class-default : 未分類の packets を照合するシステム デフォルト クラス。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	<p>priority [<i>Kb/s</i> [<i>burst_in_bytes</i>] level <i>level_value</i> [<i>Kb/s</i> [<i>burst_in_bytes</i>] percent <i>percentage</i> [<i>burst_in_bytes</i>]] percent <i>percentage</i> [<i>burst_in_bytes</i>]]</p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-pmap-c)# priority level 1 Device(config-pmap-c)#</pre>	<p>(任意) priority コマンドは、クラスに完全スケジューリングプライオリティを割り当てます。コマンドオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>Kb/s</i> : kbps を指定します (1 ~ 2000000) 。 <ul style="list-style-type: none"> ◦ <i>burst_in_bytes</i> : バイトでバーストを指定します (32 ~ 2000000) 。 • level <i>level_value</i> : マルチレベル (1 ~ 2) のプライオリティ キューを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> ◦ <i>Kb/s</i> : kbps を指定します (1 ~ 2000000) 。 ◦ <i>burst_in_bytes</i> : バイトでバーストを指定します (32 ~ 2000000) 。 • percent : 総帯域幅の割合。 <ul style="list-style-type: none"> ◦ <i>burst_in_bytes</i> : バイトでバーストを指定します (32 ~ 2000000) 。 • percent : 総帯域幅の割合。 <ul style="list-style-type: none"> ◦ <i>burst_in_bytes</i> : バイトでバーストを指定します (32 ~ 2000000) 。 <p>(注) プライオリティ レベル1はプライオリティ レベル2 より重要です。プライオリティ レベル 1 は、QoS に最初に処理される帯域幅を予約するため、遅延は非常に低くなります。プライオリティ レベル1 と2 はどちらも帯域幅を予約します。</p>
ステップ 5	<p>end</p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-pmap-c)# end Device#</pre>	<p>設定変更を保存します。</p>
ステップ 6	<p>show policy-map</p> <p>例 :</p> <pre>Device# show policy-map</pre>	<p>(任意) すべてのサービス ポリシーに設定されたすべてのクラスに関するポリシー設定情報を表示します。</p>

次の作業

ネットワークの QoS 用の追加のポリシー マップを設定します。ポリシー マップを作成したら、**service-policy** コマンドを使用してトラフィック ポリシーまたはポリシーをインターフェイスに付加します。

キューとシェーピングの設定

出力キューの特性の設定

ネットワークおよび QoS ソリューションの複雑さによっては、この項の手順をすべて実行する必要があります。次の特性を決定する必要があります。

- DSCP、CoS、または QoS グループ値によって各キューおよびしきい値 ID にマッピングされるパケット
- キューに適用されるドロップ割合のしきい値と、トラフィック タイプに必要な予約メモリと最大メモリ
- キューに割り当てる固定バッファ スペース
- ポートの帯域幅に関するレート制限の必要性
- 出力キューの処理頻度、および使用する技術（シェーピング、共有、または両方）



(注) 出力キューはデバイスでのみ設定できます。

キュー バッファの設定

を使用すると、キューにバッファを割り当てることができます。バッファが割り当てられていない場合は、すべてのキューに対して均等に分割されます。queue-buffer ratio を使用して、特定の比率で分割できます。デフォルトで DTS (Dynamic Threshold and Scaling) はすべてのキューでアクティブになるため、これらはソフト バッファになります。

はじめる前に

この手順の前提条件を次に示します。

- この手順を開始する前に、キュー バッファのクラス マップを作成する必要があります。
- キュー バッファを設定する前に、ポリシー マップの帯域幅、シェーピング、またはプライオリティを設定する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configureterminal 例 : Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	policy-map <i>policy name</i> 例 : Device (config) # policy-map policy_queuebuffer01 Device (config-pmap) #	ポリシー マップ コンフィギュレーション モードを開始します。 1 つ以上のインターフェイスに対応付けることができるポリシー マップを作成または修正し、サービス ポリシーを指定します。
ステップ 3	class <i>class name</i> 例 : Device (config-pmap) # class class_queuebuffer01 Device (config-pmap-c) #	ポリシー クラス マップ コンフィギュレーション モードを開始します。ポリシーを作成または変更するクラスの名前を指定します。ポリシー クラス マップ コンフィギュレーション モードには、次のコマンド オプションが含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> • word : クラス マップ名。 • class-default : 未分類の packets を照合するシステム デフォルト クラス。
ステップ 4	bandwidth {<i>Kb/s</i> <i>percent percentage</i> <i>remaining { ratio ratio value }</i>} 例 : Device (config-pmap-c) # bandwidth percent 80 Device (config-pmap-c) #	ポリシー マップの帯域幅を設定します。コマンド パラメータは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • Kb/s : 特定の値を設定するには、このコマンドを使用します。指定できる範囲は 20000 ~ 10000000 です。 • percent : 割合を使用して特定のクラスに最小帯域幅を割り当てます。キューは、他のキューが全体のポート帯域幅を使用しない場合は、帯域幅をオーバーサブスクライブすることができます。合計が 100 % を超えることはできません。100 % 未満の場合、帯域幅の残りは、すべての帯域幅キュー上に均等に分割されます。 • remaining : 特定のクラスに最小帯域幅を割り当てます。キューは、他のキューが全体のポート帯域幅を使用しない場合は、帯域幅をオーバーサブスクライブすることができます。合計が 100 % を超えることはできません。このコマンドは、ポリシー内の特定のキュー

	コマンドまたはアクション	目的
		<p>に対して priority コマンドが使用されている場合に使用します。各キューには、割合ではなく比率を割り当てることもできます。キューにはそれらの比率に従って、特定の重みが割り当てられます。比率は 0 ~ 100 の範囲で指定できます。この場合のポリシーの全帯域幅での比率の割り当ては、100 を超えることができません。</p> <p>(注) ポリシーマップで帯域幅タイプを混在させることはできません。</p>
ステップ 5	<p>queue-buffers {ratio ratio value}</p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-pmap-c)# queue-buffers ratio 10 Device(config-pmap-c)#</pre>	<p>キューの相対的なバッファ サイズを設定します。</p> <p>(注) ポリシーに設定されているすべてのバッファの合計が 100 % 以下である必要があります。未割り当てバッファは、残りのキューに均等に分散されます。プライオリティキューを含むすべてのキューに十分なバッファが割り当てられるようにします。</p> <p>(注) スパニングツリーや LACP などのネットワーク制御プロトコルのプロトコルデータユニット (PDU) は、プライオリティキューまたはキュー 0 (プライオリティキューが設定されていない場合) を使用します。プロトコルが機能するには、これらのキューに十分なバッファが割り当てられるようにします。</p>
ステップ 6	<p>end</p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-pmap-c)# end Device#</pre>	<p>設定変更を保存します。</p>
ステップ 7	<p>show policy-map</p> <p>例 :</p> <pre>Device# show policy-map</pre>	<p>(任意) すべてのサービス ポリシーに設定されたすべてのクラスに関するポリシー設定情報を表示します。</p>

次の作業

ネットワークの QoS 用の追加のポリシー マップを設定します。ポリシー マップを作成したら、**service-policy** コマンドを使用してトラフィック ポリシーまたはポリシーをインターフェイスに付加します。

キュー制限の設定

重み付けテールドロップ (WTD) を設定するためにキュー制限を使用します。WTD を使用すると、キューごとに複数のしきい値を設定できます。各サービス クラスが異なるしきい値でドロップされて QoS 差別化が実現されます。によって、3 つの明示的にプログラム可能なしきい値クラスとして各キューに 0、1、2 を指定できます。したがって、キューごとに各パケットのキューイング/ドロップの決定は、フレーム ヘッダーの DSCP、CoS、または QoS グループ フィールドに指定されたパケットのしきい値クラスの割り当てによって決定されます。

WTD では柔軟な制限が使用されるため、最大 400 % (共通プールで予約されるバッファの最大 4 倍) のキュー制限を設定できます。この柔軟な制限は、他の機能に影響することなく、共通プールのオーバーランを防止します。



(注) キュー制限は、有線ポートの出力キューでのみ設定できます。

はじめる前に

この手順の前提条件を次に示します。

- この手順を開始する前に、キュー制限を使用するクラス マップを作成する必要があります。
- キュー制限を設定する前に、ポリシー マップの帯域幅、シェーピング、またはプライオリティを設定する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configureterminal 例 : Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	policy-map policy name 例 : Device (config) # policy-map policy_queue-limit01 Device (config-pmap) #	ポリシー マップ コンフィギュレーション モードを開始します。 1 つ以上のインターフェイスに対応付けることができるポリシー マップを作成または修正

	コマンドまたはアクション	目的
		し、サービス ポリシーを指定します。
ス テッ プ 3	<p>class <i>class name</i></p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-pmap) # class class_queuelimit01 Device(config-pmap-c) #</pre>	<p>ポリシー クラス マップ コンフィギュレーション モードを開始します。ポリシーを作成または変更するクラスの名前を指定します。ポリシー クラス マップ コンフィギュレーション モードには、次のコマンド オプションが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • word : クラス マップ名。 • class-default : 未分類のパケットを照合するシステム デフォルト クラス。
ス テッ プ 4	<p>bandwidth {<i>Kb/s</i> percent <i>percentage</i> remaining { ratio <i>ratio value</i> }}</p> <p>例 :</p> <pre>Device(config-pmap-c) # bandwidth 500000 Device(config-pmap-c) #</pre>	<p>ポリシー マップの帯域幅を設定します。パラメータは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Kb/s : 特定の値を設定するには、このコマンドを使用します。指定できる範囲は 20000 ~ 10000000 です。 • percent : 特定のクラスに最小帯域幅を割り当てます。キューは、他のキューが全体のポート帯域幅を使用しない場合は、帯域幅をオーバーサブスクライブすることができます。合計が 100% を超えることはできません。100% 未満の場合、帯域幅の残りは、すべての帯域幅キュー上に均等に分割されます。 • remaining : 特定のクラスに最小帯域幅を割り当てます。キューは、他のキューが全体のポート帯域幅を使用しない場合は、帯域幅を

	コマンドまたはアクション	目的
		<p>オーバーサブスクライブすることができます。合計が 100% を超えることはできません。このコマンドは、ポリシー内の特定のキューに対して priority コマンドが使用されている場合に使用します。各キューには、割合ではなく比率を割り当てることもできます。キューにはそれらの比率に従って、特定の重みが割り当てられます。比率は 0 ~ 100 の範囲で指定できます。この場合のポリシーの全帯域幅での比率の割り当ては、100 を超えることができます。</p> <p>(注) ポリシー マップで帯域幅タイプを混在させることはできません。</p>
<p>ステップ 5</p>	<p>queue-limit {<i>packets</i> {<i>cos value</i> { <i>maximum threshold value</i> <i>percentage</i> } {<i>cos value</i> <i>percentage</i> } } {<i>dscp value</i> { <i>maximum threshold value</i> <i>percentage</i> } <i>match packet</i> { <i>maximum threshold value</i> <i>percentage</i> } { <i>maximum threshold value</i> <i>percentage</i> } { <i>maximum threshold value</i> <i>percentage</i> } <i>dscp value</i> } <i>percentage</i> } } packetscospercent valuespercentdscpppercentpercentdefaultpercentefpercentdscp valuespercent</p> <p>例 :</p> <pre>Device (config-pmap-c) # queue-limit dscp 3 percent 20 Device (config-pmap-c) # queue-limit dscp 4 percent 30 Device (config-pmap-c) # queue-limit dscp 5 percent 40</pre>	<p>キュー制限のしきい値の割合を設定します。</p> <p>すべてのキューで、3 つのしきい値 (0、1、2) があり、それぞれのしきい値についてデフォルト値があります。デフォルトまたはその他のキュー制限しきい値設定を変更するには、このコマンドを使用します。たとえば、DSCP 3、4、および 5 のパケットが設定した特定のキューに送信される場合、このコマンドは、この 3 つの DSCP 値のしきい値パーセンテージを設定できます。キュー制限しきい値に関する詳細については、重み付けテールドロップ、(24 ページ) を参照してください。</p>

	コマンドまたはアクション	目的
		(注) は絶対キュー制限の割合をサポートしません。は、 dscp または cos キュー制限の割合だけをサポートします。
ス テッ プ 6	end 例 : Device (config-pmap-c) # end Device#	設定変更を保存します。
ス テッ プ 7	show policy-map 例 : Device# show policy-map	(任意) すべてのサービス ポリシーに設定されたすべてのクラスに関するポリシー設定情報を表示します。

次の作業

ネットワークの QoS 用の追加ポリシー マップを設定します。ポリシー マップを作成したら、**service-policy** コマンドを使用して、トラフィック ポリシーまたはポリシーをインターフェイスに付加します。

シェーピングの設定

特定のクラスのシェーピング（最大帯域幅）を設定するには、**shape** コマンドを使用します。ポートに残っている追加帯域幅があっても、キューの帯域幅はこの値に制限されます。シェーピングは平均の割合で、または **bps** のシェーピングの平均値で設定できます。

はじめる前に

この手順を開始する前に、シェーピングのクラス マップを作成する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバルコンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 2	policy-map policy name 例： Device(config)# policy-map policy_shaping01 Device(config-pmap)#	ポリシー マップ コンフィギュレーション モードを開始します。 1 つ以上のインターフェイスに対応付けることができるポリシー マップを作成または修正し、サービス ポリシーを指定します。
ステップ 3	class class name 例： Device(config-pmap)# class class_shaping01 Device(config-pmap-c)#	ポリシー クラス マップ コンフィギュレーション モードを開始します。ポリシーを作成または変更するクラスの名前を指定します。ポリシー クラス マップ コンフィギュレーション モードには、次のコマンド オプションが含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> • word : クラス マップ名。 • class-default : 未分類のパケットを照合するシステム デフォルト クラス。
ステップ 4	shapeaverage {target bit rate percent percentage} 例： Device(config-pmap-c)# shape average percent 50 Device(config-pmap-c)#	平均シェーピング レートを設定します。平均シェーピング レートを、ターゲットビットレート (bps) または認定情報レート (CIR) のインターフェイス帯域幅の割合で設定できます。
ステップ 5	end 例： Device(config-pmap-c)# end Device#	設定変更を保存します。
ステップ 6	show policy-map 例： Device# show policy-map	(任意) すべてのサービス ポリシーに設定されたすべてのクラスに関するポリシー 設定情報を表示します。

次の作業

ネットワークの QoS 用の追加のポリシー マップを設定します。ポリシー マップを作成したら、**service-policy** コマンドを使用してトラフィック ポリシーをインターフェイスに付加します。

QoS のモニタリング

での QoS のモニタリングには、次のコマンドを使用できます。

表 11: QoS のモニタリング

コマンド	説明
show class-map [<i>class_map_name</i>]	設定されているすべてのクラス マップのリストを表示します。
show class-map type control subscriber { all <i>name</i> }	制御クラス マップと統計情報を表示します。 <ul style="list-style-type: none"> • all : すべてのクラス マップに関する情報を表示します。 • name : 設定済みのクラス マップを表示します。
show policy-map [<i>policy_map_name</i>]	設定されているすべてのポリシー マップのリストを表示します。コマンドパラメータは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • policy map name • interface • session

コマンド	説明
<pre>show policy-map interface { ANI AccessTunnel Auto-template CEM-PG FortyGigabitEthernet GigabitEthernet InternalInterface LISP Loopback Null PROTECTION_GROUP Port-channel SDH_ACR TLS_VIF TenGigabitEthernet Tunnel Vlan brief class input output wireless }</pre>	

コマンド	説明
	<p>で設定されているすべてのポリシーのランタイムと統計情報を表示します。コマンドパラメータは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ANI : 自律式ネットワーク仮想インターフェイス • AccessTunnel : アクセストンネルインターフェイス • Auto-template : Auto-Template インターフェイス • CEM-PG : 保護グループを持つ回線エミュレーションインターフェイス • FortyGigabitEthernet : 40 ギガビット イーサネット • GigabitEthernet : ギガビット イーサネット IEEE.802.3z • LISP : ロケータ/ID 分離プロトコル仮想インターフェイス • InternalInterface : 内部インターフェイス • Loopback : ループバックインターフェイス • Null : ノルインターフェイス • PROTECTION_GROUP : 保護グループコントローラ • port-channel : インターフェイスのイーサネットチャネル • SDH_ACR : 仮想SDH-ACRコントローラ • TLS-VIF : TLS 仮想イン

コマンド	説明
	ターフェイス <ul style="list-style-type: none"> • TenGigabitEthernet : 10 ギガビットイーサネット • Tunnel : トンネルインターフェイス • Vlan : Catalyst VLAN • brief : ポリシーマップの簡単な説明 • class : 各クラスの統計情報 • input : 入力ポリシー • output : 出力ポリシー • wireless : ワイヤレス
show policy-map session [input output uid <i>UUID</i>]	セッションの QoS ポリシーを表示します。コマンドパラメータは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • input : 入力ポリシー • output : 出力ポリシー • uid : SSS 固有の ID に基づくポリシー
show table-map	すべてのテーブルマップと設定を表示します。

QoS の設定例

例 : アクセスコントロールリストによる分類

この例は、アクセスコントロールリスト (ACL) を使用して QoS のパケットを分類する方法を示しています。

```
Device# configure terminal
Device(config)# access-list 101 permit ip host 12.4.1.1 host 15.2.1.1
Device(config)# class-map acl-101
Device(config-cmap)# description match on access-list 101
```

例：サービスクラス レイヤ 2 の分類

```
Device(config-cmap)# match access-group 101
Device(config-cmap)#
```

ACLを使用してクラスマップを作成した後で、クラスのポリシーマップを作成し、ポリシーマップを QoS のインターフェイスに適用します。

例：サービスクラス レイヤ 2 の分類

この例は、サービスクラス レイヤ 2 の分類を使用して QoS に対してパケットを分類する方法を示しています。

```
Device# configure terminal
Device(config)# class-map cos
Device(config-cmap)# match cos ?
<0-7> Enter up to 4 class-of-service values separated by white-spaces
Device(config-cmap)# match cos 3 4 5
Device(config-cmap)#
```

CoS レイヤ 2 の分類を使用してクラスマップを作成したら、そのクラスのポリシーマップを作成し、QoS のインターフェイスにポリシーマップを適用します。

例：サービスクラス DSCP の分類

この例は、サービスクラス DSCP の分類を使用して、QoS に対してパケットを分類する方法を示しています。

```
Device# configure terminal
Device(config)# class-map dscp
Device(config-cmap)# match dscp af21 af22 af23
Device(config-cmap)#
```

DSCP 分類を使用してクラスマップを作成したら、クラスのポリシーマップを作成し、QoS のインターフェイスにポリシーマップを適用します。

例：VLAN ID レイヤ 2 の分類

この例は、VLAN ID レイヤ 2 の分類を使用して QoS に分類する方法を示しています。

```
Device# configure terminal
Device(config)# class-map vlan-120
Device(config-cmap)# match vlan ?
<1-4095> VLAN id
Device(config-cmap)# match vlan 120
Device(config-cmap)#
```

VLAN レイヤ 2 の分類を使用してクラスマップを作成したら、クラスのポリシーマップを作成し、QoS のインターフェイスにポリシーマップを適用します。

例 : DSCP 値または precedence 値による分類

この例は、DSCP 値または precedence 値を使用してパケットを分類する方法を示しています。

```
Device# configure terminal
Device(config)# class-map prec2
Device(config-cmap)# description matching precedence 2 packets
Device(config-cmap)# match ip precedence 2
Device(config-cmap)# exit
Device(config)# class-map ef
Device(config-cmap)# description EF traffic
Device(config-cmap)# match ip dscp ef
Device(config-cmap)#
```

DSCP 値または precedence 値を使用してクラス マップを作成したら、クラスのポリシー マップを作成し、QoS のインターフェイスにポリシー マップを適用します。

例 : 階層型分類

次の例は、child という名前の別のクラスに一致する parent という名前のクラスが作成される、階層型分類を示しています。child という名前のクラスは、2 に設定された IP precedence に基づいて照合されます。

```
Device# configure terminal
Device(config)# class-map child
Device(config-cmap)# match ip precedence 2
Device(config-cmap)# exit
Device(config)# class-map parent
Device(config-cmap)# match class child
Device(config-cmap)#
```

親クラスマップを作成したら、クラスのポリシーマップを作成し、QoS のインターフェイスにポリシー マップを適用します。

例 : 階層型ポリシーの設定

次の例は、階層型ポリシーを使用した設定を示しています。

```
Device# configure terminal
Device(config)# class-map c1
Device(config-cmap)# match dscp 30
Device(config-cmap)# exit

Device(config)# class-map c2
Device(config-cmap)# match precedence 4
Device(config-cmap)# exit

Device(config)# class-map c3
Device(config-cmap)# exit

Device(config)# policy-map child
Device(config-pmap)# class c1
Device(config-pmap-c)# priority level 1
Device(config-pmap-c)# police rate percent 20 conform-action transmit exceed action drop
Device(config-pmap-c-police)# exit
```

```

Device(config-pmap-c)# exit

Device(config-pmap)# class c2
Device(config-pmap-c)# bandwidth 20000
Device(config-pmap-c)# exit
Device(config-pmap)# class class-default
Device(config-pmap-c)# bandwidth 20000
Device(config-pmap-c)# exit
Device(config-pmap)# exit

Device(config)# policy-map parent
Device(config-pmap)# class class-default
Device(config-pmap-c)# shape average 1000000
Device(config-pmap-c)# service-policy child
Device(config-pmap-c)# end

```

次の例は、テーブル マップを使用した階層型ポリシーを示しています。

```

Device(config)# table-map dscp2dscp
Device(config-tablemap)# default copy
Device(config)# table-map dscp2up
Device(config-tablemap)# map from 46 to 6
Device(config-tablemap)# map from 34 to 5
Device(config-tablemap)# default copy
Device(config)# policy-map ssid_child_policy
Device(config-pmap)# class voice
Device(config-pmap-c)# priority level 1
Device(config-pmap-c)# police 15000000
Device(config-pmap)# class video
Device(config-pmap-c)# priority level 2
Device(config-pmap-c)# police 10000000
Device(config)# policy-map ssid_policy
Device(config-pmap)# class class-default
Device(config-pmap-c)# shape average 30000000
Device(config-pmap-c)# queue-buffer ratio 0
Device(config-pmap-c)# set dscp dscp table dscp2dscp
Device(config-pmap-c)# service-policy ssid_child_policy

```

例：音声およびビデオの分類

この例は、デバイス固有の情報を使用して、音声とビデオのパケット ストリームを分類する方法を示しています。

この例では、音声とビデオがエンドポイント A からデバイスの GigabitEthernet1/0/1 に送信され、それぞれ precedence 値 5 と 6 を持ちます。また、音声とビデオは、エンドポイント B からデバイスの GigabitEthernet1/0/2 にそれぞれ DSCP 値 EF と AF11 で送信されます。

両方のインターフェイスからのすべてのパケットがアップリンク インターフェイスに送信されません。その場合、音声は 100 Mbps にポリシングし、ビデオは 150 Mbps にポリシングする必要があります。

上記の要件ごとに分類するために、GigabitEthernet1/0/1 で送信される音声パケットに一致するクラスが作成されます。これには、precedence 5 に一致する voice-interface-1 という名前が付けられます。同様に、GigabitEthernet1/0/2 の音声パケットに一致する、voice-interface-2 という名前の音声用の別のクラスが作成されます。これらのクラスは、GigabitEthernet1/0/1 に接続される input-interface-1 と、GigabitEthernet1/0/2 に接続される input-interface-2 という 2 つの別個のポリシーに関連付けられます。このクラスのアクションは、qos-group に 10 とマーキングすることです。出力インターフェイスで QoS-group 10 のパケットを照合するために、QoS-group 10 で一致する voice という名前のクラスが作成されます。これは、output-interface という名前の別のポリシーに関連付けられ、

アップリンク インターフェイスに関連付けられます。ビデオも同じ方法で処理されますが、QoS-group 20 で一致します。

次の例は、上記のデバイス固有の情報を使用して分類する方法を示しています。

```
Device(config)#
Device(config)# class-map voice-interface-1
Device(config-cmap)# match ip precedence 5
Device(config-cmap)# exit

Device(config)# class-map video-interface-1
Device(config-cmap)# match ip precedence 6
Device(config-cmap)# exit

Device(config)# class-map voice-interface-2
Device(config-cmap)# match ip dscp ef
Device(config-cmap)# exit

Device(config)# class-map video-interface-2
Device(config-cmap)# match ip dscp af11
Device(config-cmap)# exit

Device(config)# policy-map input-interface-1
Device(config-pmap)# class voice-interface-1
Device(config-pmap-c)# set qos-group 10
Device(config-pmap-c)# exit

Device(config-pmap)# class video-interface-1
Device(config-pmap-c)# set qos-group 20

Device(config-pmap-c)# policy-map input-interface-2
Device(config-pmap)# class voice-interface-2
Device(config-pmap-c)# set qos-group 10
Device(config-pmap-c)# class video-interface-2
Device(config-pmap-c)# set qos-group 20
Device(config-pmap-c)# exit
Device(config-pmap-c)# exit

Device(config)# class-map voice
Device(config-cmap)# match qos-group 10
Device(config-cmap)# exit

Device(config)# class-map video
Device(config-cmap)# match qos-group 20

Device(config)# policy-map output-interface
Device(config-pmap)# class voice
Device(config-pmap-c)# police 256000 conform-action transmit exceed-action drop
Device(config-pmap-c-police)# exit
Device(config-pmap-c)# exit

Device(config-pmap)# class video
Device(config-pmap-c)# police 1024000 conform-action transmit exceed-action drop
Device(config-pmap-c-police)# exit
Device(config-pmap-c)# exit
```

例：平均レートシェーピングの設定

次の例は、平均レートシェーピングを設定する方法を示しています。

```
Device# configure terminal
Device(config)# class-map precl
Device(config-cmap)# description matching precedence 1 packets
Device(config-cmap)# match ip precedence 1
```

```

Device(config-cmap) # end

Device# configure terminal
Device(config)# class-map prec2
Device(config-cmap) # description matching precedence 2 packets
Device(config-cmap) # match ip precedence 2
Device(config-cmap) # exit

Device(config)# policy-map shaper
Device(config-pmap) # class prec1
Device(config-pmap-c) # shape average 512000
Device(config-pmap-c) # exit

Device(config-pmap) # policy-map shaper
Device(config-pmap) # class prec2
Device(config-pmap-c) # shape average 512000
Device(config-pmap-c) # exit

Device(config-pmap) # class class-default
Device(config-pmap-c) # shape average 1024000

```

クラスマップ、ポリシーマップ、シェーピング平均を設定したら、QoSのインターフェイスにポリシーマップを適用します。

例：キュー制限の設定

次の例は、DSCP値および割合に基づいて、キュー制限ポリシーを設定する方法を示しています。

```

Device# configure terminal
Device#(config)# policy-map port-queue
Device#(config-pmap) # class dscp-1-2-3
Device#(config-pmap-c) # bandwidth percent 20
Device#(config-pmap-c) # queue-limit dscp 1 percent 80
Device#(config-pmap-c) # queue-limit dscp 2 percent 90
Device#(config-pmap-c) # queue-limit dscp 3 percent 100
Device#(config-pmap-c) # exit

Device#(config-pmap) # class dscp-4-5-6
Device#(config-pmap-c) # bandwidth percent 20
Device#(config-pmap-c) # queue-limit dscp 4 percent 20
Device#(config-pmap-c) # queue-limit dscp 5 percent 30
Device#(config-pmap-c) # queue-limit dscp 6 percent 20
Device#(config-pmap-c) # exit

Device#(config-pmap) # class dscp-7-8-9
Device#(config-pmap-c) # bandwidth percent 20
Device#(config-pmap-c) # queue-limit dscp 7 percent 20
Device#(config-pmap-c) # queue-limit dscp 8 percent 30
Device#(config-pmap-c) # queue-limit dscp 9 percent 20
Device#(config-pmap-c) # exit

Device#(config-pmap) # class dscp-10-11-12
Device#(config-pmap-c) # bandwidth percent 20
Device#(config-pmap-c) # queue-limit dscp 10 percent 20
Device#(config-pmap-c) # queue-limit dscp 11 percent 30
Device#(config-pmap-c) # queue-limit dscp 12 percent 20
Device#(config-pmap-c) # exit

Device#(config-pmap) # class dscp-13-14-15
Device#(config-pmap-c) # bandwidth percent 10
Device#(config-pmap-c) # queue-limit dscp 13 percent 20
Device#(config-pmap-c) # queue-limit dscp 14 percent 30
Device#(config-pmap-c) # queue-limit dscp 15 percent 20
Device#(config-pmap-c) # end

```



```
Device#
```

上記のポリシー マップのキュー制限の設定が終了すると、QoS のインターフェイスにポリシー マップを適用することができます。

例：キューバッファの設定

次の例は、キューバッファ ポリシーを設定して QoS のインターフェイスに適用する方法を示しています。

```
Device# configure terminal
Device(config)# policy-map policy1001
Device(config-pmap)# class class1001
Device(config-pmap-c)# bandwidth remaining ratio 10
Device(config-pmap-c)# queue-buffer ratio ?
    <0-100> Queue-buffers ratio limit
Device(config-pmap-c)# queue-buffer ratio 20
Device(config-pmap-c)# end

Device# configure terminal
Device(config)# interface gigabitEthernet2/0/3
Device(config-if)# service-policy output policy1001
Device(config-if)# end
```

例：ポリシングアクションの設定

次の例は、ポリサーに関連付けることができるさまざまなポリシングアクションを示しています。これらのアクションは、パケット設定の適合、超過、または違反によって実現されます。トラフィック プロファイルを超過または違反したパケットをドロップ、マーク付け、または送信することができます。

たとえば、1つの一般的な導入シナリオでは、エンタープライズ顧客ポリシートラフィックがネットワークからサービス プロバイダーに送信され、DSCP 値が異なる、適合、超過、および違反パケットをマーキングします。サービス プロバイダーは、輻輳があると DSCP 値の超過および違反としてマーキングされたパケットをドロップすることができますが、使用可能な帯域幅がある場合は送信することも可能です。



(注) Layer 2 フィールドには CoS フィールドが含まれるようにマーキングでき、Layer 3 フィールドには precedence および DSCP フィールドが含まれるようにマーキングできます。

1つの便利な機能として、複数のアクションとイベントを関連付ける機能があります。たとえば、すべての適合パケットについて、precedence ビットと CoS を設定できます。アクションを設定するサブモードは、ポリシング機能によって配信できます。

これは、ポリシングアクションの設定例を示しています。

```
Device# configure terminal
Device(config)# policy-map police
Device(config-pmap)# class class-default
```

```

Device(config-pmap-c)# police cir 1000000 pir 2000000
Device(config-pmap-c-police)# conform-action transmit
Device(config-pmap-c-police)# exceed-action set-dscp-transmit dscp table exceed-markdown-table
Device(config-pmap-c-police)# violate-action set-dscp-transmit dscp table
violate-markdown-table
Device(config-pmap-c-police)# end

```

この例では、exceed-markdown-table と violate-mark-down-table がテーブル マップです。



(注) ポリサー ベースのマークダウンアクションは、テーブル マップを使用する場合のみサポートされます。デバイスの各マーキング フィールドで許可されているマークダウンテーブル マップは1つだけです。

例：ポリサーの VLAN 設定

次の例では、VLAN のポリサー設定を表示します。この設定の最後に、QoS のインターフェイスに VLAN ポリシー マップを適用します。

```

Device# configure terminal
Device(config)# class-map vlan100
Device(config-cmap)# match vlan 100
Device(config-cmap)# exit
Device(config)# policy-map vlan100
Device(config-pmap)# policy-map class vlan100
Device(config-pmap-c)# police 100000 bc conform-action transmit exceed-action drop
Device(config-pmap-c-police)# end
Device# configure terminal
Device(config)# interface gigabitEthernet1/0/5
Device(config-if)# service-policy input vlan100

```

例：ポリシングの単位

次の例は、QoS でサポートされるポリシングのさまざまな単位を示しています。ポリシングの単位はトークンバケットが動作する基盤です。

次の単位のポリシングがサポートされています。

- CIR および PIR はビット/秒で指定します。バーストパラメータはバイト単位で指定します。これはデフォルトのモードであり、単位が指定されていない場合に使用される単位です。CIR および PIR は、パーセントでも設定できます。その場合バーストパラメータをミリ秒単位で設定する必要があります。
- CIR および PIR はパケット/秒で指定します。この場合、バーストパラメータもパケットで設定されます。

次の例は、ビット/秒のポリサー設定を示しています。

```

Device(config)# policy-map bps-policer
Device(config-pmap)# class class-default
Device(config-pmap-c)# police rate 256000 bps burst 1000 bytes

```

```
conform-action transmit exceed-action drop
```

次の例は、パケット/秒のポリサー設定を示しています。この設定では、測定単位がパケットであるデュアルレートの 3 カラー ポリサーが設定されます。バーストおよびピーク バーストはすべてパケットに指定されます。

```
Device(config)# policy-map pps-policer
Device(config-pmap)# class class-default
Device(config-pmap-c)# police rate 5000 pps burst 100 packets
peak-rate 10000 pps peak-burst 200 packets conform-action transmit
exceed-action drop violate-action drop
```

例：シングルレート 2 カラー ポリシング設定

次の例は、シングルレート 2 カラー ポリサーを設定する方法を示しています。

```
Device(config)# class-map match-any precl
Device(config-cmap)# match ip precedence 1
Device(config-cmap)# exit
Device(config)# policy-map policer
Device(config-pmap)# class precl
Device(config-pmap-c)# police cir 256000 conform-action transmit exceed-action drop
Device(config-pmap-c-police)# exit
Device(config-pmap-c)#
```

例：デュアルレート 3 カラー ポリシング設定

次の例は、デュアルレート 3 カラー ポリサーを設定する方法を示しています。

```
Device# configure terminal
Device(config)# policy-map dual-rate-3color-policer
Device(config-pmap)# class class-default
Device(config-pmap-c)# police cir 64000 bc 2000 pir 128000 be 2000
Device(config-pmap-c-police)# conform-action transmit
Device(config-pmap-c-police)# exceed-action set-dscp-transmit dscp table exceed-markdown-table
Device(config-pmap-c-police)# violate-action set-dscp-transmit dscp table
violate-markdown-table
Device(config-pmap-c-police)# exit
Device(config-pmap-c)#
```

この例では、exceed-markdown-table と violate-mark-down-table がテーブル マップです。



(注)

ポリサー ベースのマークダウンアクションは、テーブルマップを使用する場合のみサポートされます。デバイスの各マーキング フィールドで許可されているマークダウンテーブルマップは 1 つだけです。

例：テーブル マップのマーキング設定

次のステップと例は、QoS 設定でテーブル マップ マーキングを使用する方法を示しています。

1 テーブルマップを定義します。

table-map コマンドを使用してテーブルマップを定義し、値のマッピングを示します。このテーブルでは、テーブルが使用されるポリシーまたはクラスを認識しません。テーブルマップのデフォルトのコマンドは、一致する「from」フィールドがない場合に、「to」フィールドにコピーされる値を示します。この例では、**table-map1** というテーブルマップが作成されます。定義されたマッピングでは、値 0 が 1 に、2 が 3 に変換され、デフォルト値は 4 に設定されます。

```
Device(config)# table-map table-map1
Device(config-tablemap)# map from 0 to 1
Device(config-tablemap)# map from 2 to 3
Device(config-tablemap)# default 4
Device(config-tablemap)# exit
```

2 テーブルマップが使用されるポリシーマップを定義します。

この例では、着信 CoS が **table-map1** テーブルで指定されたマッピングに基づいて、DSCP にマッピングされます。この例では、着信パケットの DSCP が 0 である場合、パケット内の CoS は 1 に設定されます。テーブルマップ名が指定されていない場合、このコマンドではデフォルトの動作が実行され、値が「from」フィールド（この場合は DSCP）から「to」フィールド（この場合は CoS）にコピーされます。ただし、CoS が 3 ビットフィールドであっても DSCP は 6 ビットフィールドです。これは、DSCP 内の最初の 3 ビットに CoS がコピーされることを意味します。

```
Device(config)# policy map policy1
Device(config-pmap)# class class-default
Device(config-pmap-c)# set cos dscp table table-map1
Device(config-pmap-c)# exit
```

3 ポリシーをインターフェイスに関連付けます。

```
Device(config)# interface GigabitEthernet1/0/1
Device(config-if)# service-policy output policy1
Device(config-if)# exit
```

例 : CoS マーキングを保持するテーブルマップの設定

次の例は、テーブルマップを使用して、QoS 設定のインターフェイスで CoS マーキングを保持する方法を示しています。

（例で設定されている）**cos-trust-policy** ポリシーは入力方向でイネーブルになり、インターフェイスに着信する CoS マーキングが保持されます。ポリシーがイネーブルになっていない場合は、デフォルトで DSCP だけが信頼されます。純粋なレイヤ 2 パケットがインターフェイスに着信すると、CoS の入力ポートに一致するポリシーがない場合は、CoS 値が 0 に書き換えられます。

```
Device# configure terminal
Device(config)# table-map cos2cos
Device(config-tablemap)# default copy
Device(config-tablemap)# exit
```

```

Device(config)# policy map cos-trust-policy
Device(config-pmap)# class class-default
Device(config-pmap-c)# set cos cos table cos2cos
Device(config-pmap-c)# exit

Device(config)# interface GigabitEthernet1/0/2
Device(config-if)# service-policy input cos-trust-policy
Device(config-if)# exit

```

次の作業

QoS 設定でこれらの自動機能を使用できるかどうかについては、自動 QoS のマニュアルを参照してください。

QoS に関する追加情報

関連資料

関連項目	参照先
この章で使用するコマンドの完全な構文および使用方法の詳細。	<i>Command Reference (Catalyst 9300 Series Switches)</i> 『Cisco IOS Quality of Service Solutions Command Reference』

エラー メッセージ デコーダ

説明	リンク
このリリースのシステム エラー メッセージを調査し解決するために、エラー メッセージ デコーダ ツールを使用します。	https://www.cisco.com/cgi-bin/Support/Errordecoder/index.cgi

標準および RFC

標準/RFC	役職 (Title)
—	

MIB

MIB	MIB リンク
本リリースでサポートするすべての MIB	<p>選択したプラットフォーム、Cisco IOS リリース、およびフィチャセットに関する MIB を探してダウンロードするには、次の URL にある Cisco MIB Locator を使用します。</p> <p>http://www.cisco.com/go/mibs</p>

テクニカル サポート

説明	リンク
<p>シスコのサポート Web サイトでは、シスコの製品やテクノロジーに関するトラブルシューティングにお役立ていただけるように、マニュアルやツールをはじめとする豊富なオンラインリソースを提供しています。</p> <p>お使いの製品のセキュリティ情報や技術情報を入手するために、Product Alert Tool (Field Notice からアクセス)、Cisco Technical Services Newsletter、Really Simple Syndication (RSS) フィードなどの各種サービスに加入できます。</p> <p>シスコのサポート Web サイトのツールにアクセスする際は、Cisco.com のユーザ ID およびパスワードが必要です。</p>	<p>http://www.cisco.com/support</p>

QoS の機能履歴と情報

表 12: QoS の機能情報

機能名 (Feature Name)	リリース	機能情報
QoS の機能	Cisco IOS XE Everest 16.5.1a	<p>有線ターゲットの QoS をサポートします。</p> <p>(注) このリリースでは、コンバージドアクセスをサポートしていません。</p>